

埋蔵文化財発掘調査報告

御産所11号古墳

忽那山古墳

久万ノ台古墳

1976

松山市教育委員会

序 文

松山市は道後平野の北西部に位置し、南には四国山脈が走り、西と北は瀬戸内海に面して、東方の山地から西に向って流れる重信川と東北から平野を斜めに横切って流れる石手川は氾濫原を作り、平野をうるおし、古くから農耕文化が栄えたところであります。

このような歴史的背景から、当松山市には昭和47年11月9日発見された古照遺跡をはじめ、数多くの埋蔵文化財が散在していることが過去の発掘調査や遺跡分布調査により確認されているところであります。

近年、文化財保護が喧伝されながら、一方では宅地造成などの開発行為により、古墳や古代の住居跡など貴重な歴史の遺産が無知や無自覚により一朝の中に消滅していく事例は少くありません。このような事態から埋蔵文化財をまもり、後世に伝えていくことは我々国民に課せられた責務であります。昨年、7月文化財保護法の大幅な改正が行われ、就中、埋蔵文化財の保存、保護の規定が強化、拡充されたゆえんもこの点にあったわけであります。

この報告書は、御産所、忽那山、久万ノ台の3遺跡の事前発掘調査にかかるものでありますが、本報告書によって、多くのかたがたが埋蔵文化財を認識されるとともに広くご活用をしていただくことを念願するものであります。

終りにあたって、発掘調査にあたられたかたがたをはじめ、多くの協力者のご尽力に対し、厚くお礼申しあげます。

昭和51年3月31日

松山市教育長 関 谷 勝 良

例　　言

1. 本書は昭和48年4月26日～5月5日間に実施した御産所11号墳、同年8月29日～9月6日間に実施の忽那山古墳、同年11月1日～11月22日間に実施の久万ノ台古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査は松山市教育委員会が主体者となり実施したものであるが、県立西高等学校新設にともなう久万ノ台古墳の調査は県教育委員会の協力を得て発掘調査が行われた。

発掘調査体制は次のとおりである。

調査主体	松山市教育委員会	調査団
教育長	関谷 勝良	調査主任 森 光晴 (市教委指導主事)
教育次長	中村 安定	調査員 長井 敦秋 (県文化課教育専門員)
社会教育課長	谷川 敏一	八木 武弘 (県文化課教育専門員補)
社会教育課長補佐	野間 清典	調査員補 米倉 豊 (南高等学校教諭)
主幹補兼文化係長	岸 郁男	吉本 拓 (新居浜西高等学校教諭)
社会教育課主事	矢野 完	秦 清昭 (新居浜東高等学校教諭)
社会教育課主事	西尾 幸則	梅木 賢正 (八幡浜工業高等学校教諭)
		坂本 安光 (松山市御幸中学校教諭)

3. 御産所11号墳及び、忽那山古墳における調査は森光晴を主任とし、岸郁男、矢野完、西尾幸則を中心に実施された。
4. 本書の執筆は、次の各氏の分担による。
森 光晴　西尾幸則　沖野新一 (愛媛大学人文4回生)
5. 本書の作成にあたって、遺構・遺物の実測・製図は上記執筆者の外、池田学・松村淳・越智武志・仙波五月・仙波千春の協力を得た。遺物・遺跡の写真撮影は、西尾幸則・池田学が担当した。
6. 本調査報告書にかかる3遺跡の調査に亘っての発掘調査協力者
末光祐之・田中勝海・東るみ子・本山節子・松本新一・渡部正治
7. 久万ノ台遺跡の調査においては、市教育委員会の職員の労力奉仕による発掘体制が組まれた。

本文目次

第Ⅰ章 序 説

1 遺跡と環境	1
2 御産所11号墳その他の調査経過	3
3 発掘日誌	4

第Ⅱ章 御産所11号墳の調査

1 古墳の立地	7
2 古墳の調査	7
3 被 葬 者	14
4 遺 物	15
5 小 結	18

第Ⅲ章 忽那山古墳の外因造構の調査

1 古墳の立地	19
2 古墳外因の調査と遺物	20

第Ⅳ章 久万ノ台古墳の調査

1 古墳の立地	24
2 1号墳の調査	24
3 1号墳の遺物	28
4 3号墳の調査	33
5 3号墳の遺物	38
6 2号墳の調査と土塙墓	42
7 小結	43

図版目次

図版第1 出土状況	上、奥壁部よりみる遺物の出土状況・下、同…47 上アップ
図版第2 人骨の出土状況	…18
図版第3 御産所の遠景	上、遺物鉄鎌・中、主体部と右側壁の基礎石…49 ・西衣山よりみた11号墳
図版第4 忽那山遺構の状況1	山麓の汚物処理場・1号墳落下状況・転落の…50 1号墳遺物採集
図版第5 忽那山遺構の状況2	上左、転落した石室上下転倒・上右、転落位…51 置を下方よりとる中古墳外周の遺構・下、古 墳外周の遺構
図版第6 全景と1号墳	久万ノ台遺跡発堀地点・1号墳石室内部…52
図版第7 遺構1	1号墳奥壁の立石・1号墳右側壁石積…53
図版第8 遺構2	奥壁側・区画された礫床・前庭側…54
図版第9 遺構3	礫床の割り付け・1号墳内部のようす…55
図版第10 出土状況1	遺物出土状況1, 2, 3, …56
図版第11 出土状況2	1号墳内部の鉄器と人骨の出土状況…57
図版第12 出土状況3	ノミ痕のある壊石1, 2, 人骨の細片…58
図版第13 主体部の状況1	3号墳の出土状況・玄門立石と羨道の掘り方…59 礫床
図版第14 主体部の状況2	左側壁より見た礫床・内部の出土状況・奥壁…60 よりの礫床
図版第15 遺物出土状況1	上、金環の出土状況・中、鉄鎌とクツワ・下…61 玉類の出土・上、金環の出土状況・中、高坏・

下、壺

図版第16 遺物出土状況2	周溝内部・同上アップ・周溝出土状況・同上…62 ト アップ・周溝内の遺物
図版第17 遺構の状況1	三和土使用の壁面・床面・天井部の三和土落…63 下状況・T P 4 の鉄器出土状況 (網目間10×10cm)
図版第18 遺構の状況2	植物遺体検出・壁面の三和土土括の切り合い…64 T P 4 鉄器出土
図版第19 発堀状況と遠景	トレンチ調査・土砂採集により露出した石積…65 と墳丘・発堀前・発堀風景
図版第20 御所11号墳出土遺物66
図版第21 忽那山出土遺物67
図版第22 久万ノ台1号墳出土遺物168
図版第23 1号墳出土遺物269
図版第24 1号墳出土遺物370
図版第25 1号墳出土遺物471
図版第26 1・3号墳出土遺物・鉄器1号墳・須恵器3号墳72
図版第27 3号墳出土遺物73

挿図目次

第1図 周辺部の主要遺跡 (国土地理院5万分ノ1(三津浜))	
分載 森 光晴作)	2
第2図 御産所11号墳 墳丘実測.....	8
第3図 御産所古墳群の分布 $\frac{1}{10000}$	9
第4図 墳丘と主体部位置図.....	10
第5図 墳丘断面図.....	10
第6図 石室展開図 (1, 2, 3, 4,)	11
第7図 人骨出土状況図 (1, 2, 3, 4,)　出土遺物状況図.....	12
第8図 須恵器.....	15
第9図 金環.....	15
第10図 玉類.....	16
第11図 鉄鎌と刀子.....	16
第12図 (忽那山古墳) 遺跡位置図.....	19
第13図 実測図.....	20
第14図 遺構図.....	21
第15図 須恵器.....	22
第16図 石器と玉類.....	23
第17図 久万ノ台墳丘実測図.....	25
第18図 石室構造.....	26
第19図 遺体・遺物出土状況.....	27
第20図 玉.....	30
第21図 金環.....	31
第22図 須恵器 (1号墳)	31

第23図	直刀実測図	32
第24図	鉄鎌・馬具実測図	33
第25図	主体部と周辺平面図（3号墳）	34
第26図	石室の構造	35
第27図	石室の構造と出土遺物の実測図	35
第28図	礫床と断面図	35
第29図	須恵器実測図	36
第30図	玉と勾玉実測図	39
第31図	耳環実測図	39
第32図	鉄器実測図	40
第33図	土師式土器実測図	41
第34図	土塁実測図	42
第35図	3号墳 E～W断面図	44
第36図	1～3号への断面図	44

第一章 序 説

1 遺跡と環境

(1) 地理的環境

松山平野の中央部に転在する星ノ岡、東山、天山、土巣山の外に松山城のある勝山の独立丘陵（残丘）がある。これらの独立丘陵の西方の海岸線に平行して大峰ヶ台、岩子山、弁天山、衣山、久万ノ台、東山、太山寺などの丘陵が南北に長く続いている。これらの内陸部に転在する残丘は、白亜紀の和泉砂岩系であるのに対して、海岸線に平行する残丘は大峰ヶ台、弁天山の南側1部を和泉砂岩帶が層行する。他は花崗岩系であり、高繩山系の残丘と見るべきであろう。

これら海岸線に平行している残丘は、松山平野の内陸部に対する大いなる自然的環境を作り出したことは言をまたない。これらの丘陵頂や陵線に数多くの弥生式土器文化時代の包含地や遺構は実に多く、弥生以前の松山平野を支配した。縄文時代（後期）～（晩期）にかけての遺物も採集されている。この縄文晩期の遺跡としては安城寺船ヶ谷遺跡があり、低地遺跡としての往時をしのぶ、松山平野における貴重な遺跡であるとともにこれらの丘陵の東側の山麓部を蛇行しながら堀江港に注ぐ久万川のもたらした文化圏ともいえる。

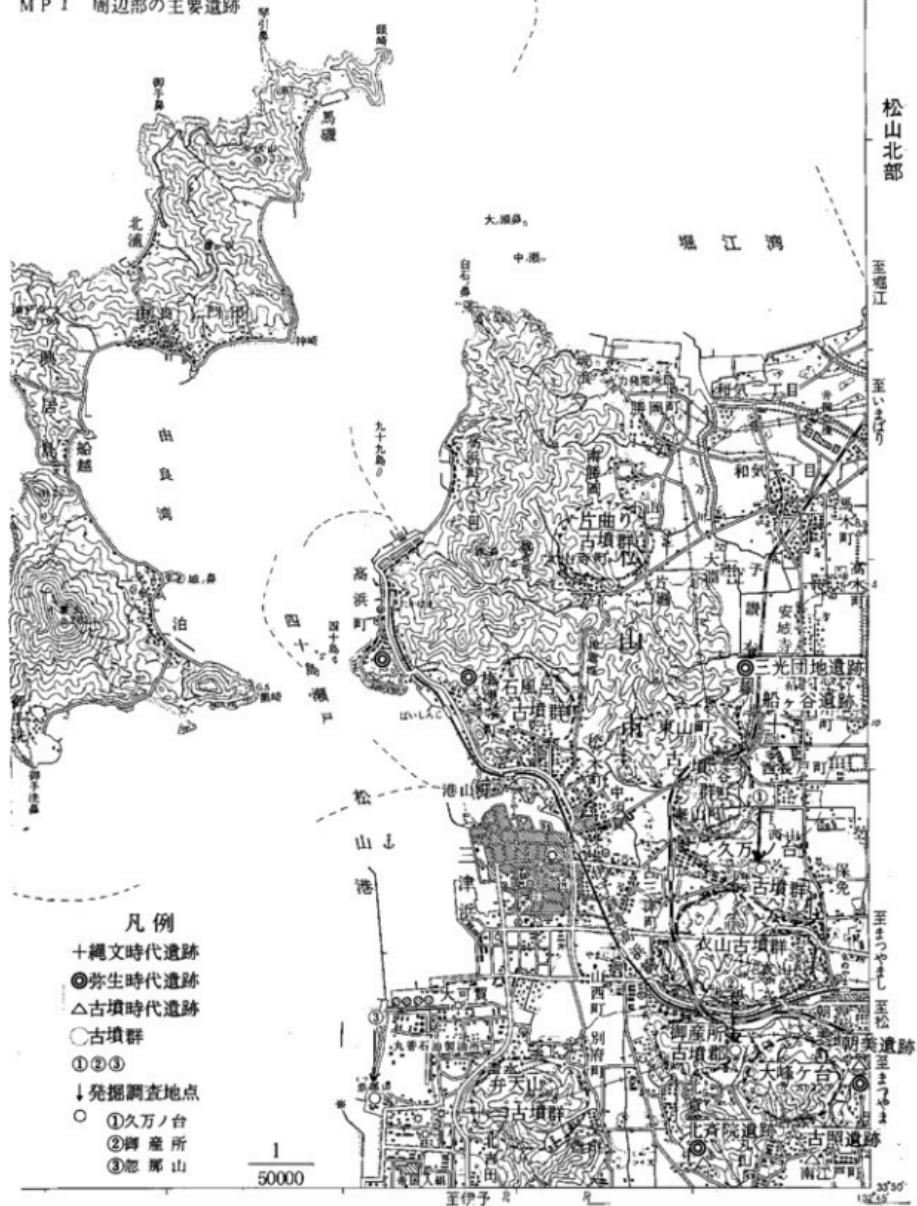
この丘陵に登れば、西に伊予灘を望み、見返れば久万川の対岸には高繩山系の分岐山脈の低丘陵が指呼の内にあり、目を南面にはせれば点在する勝山、天山諸山の独立丘陵のはるかかなに四国山地の石鎧連山が眺望できる。この平野を3分割する河川、重信川と石手川が望まれ、2大河川による沖積平野がかもし出す自然の恵みをひしひしと感じさせられる。

(2) 歴史的環境

本丘陵地帯は現在もなお松山の市街と旧三津浜町を結ぶ交通の要地と考えられる。この丘陵地帯の利用いかんによっては、今後の松山市の発展を左右するであろうと思われるほど重要な、地帯であるとも言えよう。この丘陵を古代にさかのぼり考慮するならば、西斜面は伊予灘に望む海岸線であり、丘陵の東斜面は海の荒波と寒風を遮る安住の地として古くより生活が営まれた好適地である。

丘陵周辺の遺跡（地図1）を見るならば、古くは縄文後期から晩期に渡る船ヶ谷跡があり、この遺跡の調査概報によれば、漁撈用具、土偶の発見例が報じられている。（注1）この時代につぐ弥生時代前期の木葉文土器が崎崎において出土しており、続く中期の遺物は丘陵の各所より採集しており、丘陵の麓では弥生後期の土器片が各所で発見されている。また、弥

MP 1 周辺部の主要遺跡



生時代の人々の生活の場は、今後の発掘調査により随所で発見されるであろうと推察している。

ちなみに安城寺町三光団地遺跡出土の土器の底部に軽の圧痕が認められたが、このことから当時代に麓の低湿地の沖積地を利用して農耕を営んだことが明らかとなる。また当時の人々の墓はこの丘陵の丘頂及び稜線に集中しており、これら丘陵は次の古墳時代においても、彼等の聖地として大いに利用するところとなったものと思われる。 (森 光晴)

2 御産所11号墳とその他の調査経過

(1) 御産所11号墳

高度経済成長のひずみは、自然破壊をもたらし、ひいては埋蔵文化財の破壊へと続くことは、いずれの地区においても同様である。

この地域の丘陵の古墳群についても市街地と至近の距離にあり、一部不動産業者的心ない所業により、これら古墳群の大半が破壊のうきめをみていたものである。当方に埋蔵文化財が散在していることは一部の考古爱好者によって知られていたことでもあり、すでにその人達の手によって出土遺物が採集されたりもしていた。

こうした事業の経過の中で調査を進めなければならなかったわけであるが、結局はその大半が破壊されていたため、十分なる調査結果を得るにはいたらなかつたが、今回調査した11号墳はこの地域の古墳群の一端をうかがい知る資料として貴重なものであった。

(2) 忽那山古墳

忽那山は、戦前は軍事上の要地として大いに活用され、丘陵地帯全域に砲座及び壕が設けられ、この施設を使用し第二次世界大戦中には艦載機の来襲に対しても大いに威力を發揮した要地だけに、当残丘上は誠に網の目のごとく縦横に壕をめぐらし、古墳の石室は弾薬庫としての格好の収蔵庫として利用されているものもあった。

この地の調査は、当初より完全なる遺構検出は望むことすらナンセンスであったが、3基の古墳(円墳)を確認しており、以上の諸事象における諸行為は理蔵文化財における破壊は避けられないものであったが、この現状を知る必要もあった。この地の開発とともに残丘の掘削はこれらを知る上で好資料を得るものと調査に踏み切った。

長期の雨季と集中豪雨により、第1号古墳は完全に山麓部まで調査中途にして転落する次第となった、その理由として戦中に設置された山麓地域の弾薬庫の掘削工事が開発作業により、この山崩れを誘発したものでもあった。この山崩れにより、第1号古墳は全壊したのであるが、若干の資料を採集したことと、その外部遺構として、土師式土器を伴なう遺構を検出した。

(3) 久万の台古墳

久万の台古墳群の発掘調査は、松山市の人口増加と、それに比例して増加する子弟の、教育施設、特に公立高校の不足を補うため、これが建設の開発計画をたてられたことによる。

松山市に既存する公立高校普通科は、東、南、北、とあるが、三津浜地区をひかえているにもかかわらず、西高の設立はいまだ実現するにいたらなかった。この点について、松山市 P T A 連合会等が主体となり、「松山市に是非普通科高校 1 校増設を」の市民運動を展開し、ついに久万の台に、西校新設のはこびとなった。これにより 4 月開校をめどに急速開発許可をとりつけた。

しかし当地域はかねてより埋蔵文化財の包含地及び、久万の台古墳群として松山市文化財遺跡地図にも記載されている地域であり、埋蔵文化財の調査を必要とし、緊急調査が実施されたのであった。なお緊急とはいって、はからずもこの調査期と、土地所有者たる果樹栽培農家の収穫期とが一致し非常に困難な中での調査に始終したので、今後の調査はかかる点も考慮して実施したい。

(森 光晴)

3 発掘日誌

(1) 御産所11号墳

48年 4月26日 晴 墳丘の実測とベンチマークを設定した。

4月28日 晴 トレンチ設定し発掘を開始した。—50cmで配石を発見、午後配石内の流入土の排除作業をする。16時—80cmで 2 個の須恵器を発見し、北壁中央部で鉄鏃 1 個検出した。見学者 8 名。

4月29日 晴 玄室内部の発掘を主に行う。トレンチの断面を測量した。見学者 8 名
午後東壁面で人骨発見、北壁面で鉄鏃 2 個発見、白玉 7 個を検出した。

4月30日 晴 人骨の発見確認に主力を注ぐ。出土遺物は鉄鏃（平形） 1 個、白玉 10 個、細根鉄鏃 4 本などであった。見学者 7 名

5月 1 日 晴 人骨合計 7 体を確認した。西、南壁面の実測をした。

5月 2 日 雨天 人骨の取りあげ作業、
北壁で鉄鏃 1 個を検出
した。

5月 3 日 晴 人骨の取りあげ作業を
終日実施した。

5月 4 日 雨天時々晴 人骨の取りあげと北壁
面実測、管玉 11、丸玉
30 個などであった。南
海取材



5月 5日 晴 人骨の取りあげと壁面の掘方調査をした。出土品は管玉 8、丸玉30出土

(2) 忽那山古墳

- 48年8月29日 晴 墳丘調査及び墳丘測量後表土はぎの準備をする。須恵器片数片採取
- 8月30日 晴 表土の排除作業を開始した。一号墓完形の石包丁出土
- 8月31日 晴 第1遺構（土塁）の排土作業をした。出土品は須恵器片 2点
- 9月 1日 晴 第2遺構の掘り下げをした。
- 9月 2日 晴 第1・第2遺構の掘り
下げをした。出土品は
石鏡 1個発見
- 9月 3日 晴 第2遺構の平面測量を行なった。3号遺跡より須恵器坏
- 9月 4日 晴 第1遺構の断面図作成をした。
- 9月 5日 晴 第1~2号遺跡以外の遺構検査をした。
- 9月 6日 晴 第3号遺跡の全体確認は出来なかった。



忽那山第1遺構の状況



1号墳を3号墳より望む

- (3) 久万ノ台古墳
- 48年11月 1日 鮎 1号墳墳丘調査と測量を行い、ユンボによるトレレンチ設定を行った。
- 11月 2日 晴 1号墳上に設置されていた水槽の撤去と2号墳付近を手掘によりトレレンチ設定を開始した。
- 11月 3日 晴 1号墳の発掘開始。1号塚のトレレンチを手掘りする。
写真専用足場造り作業
- 11月 4日 晴 1・2号墳の発掘と1号塚のトレレンチ内の実



久万ノ台3号墳 周辺の検出 (W面)

- 測を行った。1号塚遺構なし。
- 11月5日 曇 1号墳奥壁部に直刀を発見した。2号墳周辺に土塙墓を検出した。
- 11月7日 曇 1号墳実測、2号墳停止、土塙墓検出作業をする。
ユンボでBトレンチの掘削をしAトレンチを実測した。
- 11月8日 晴 1号墳石室内部の剣を実測。発掘した土塙墓は4墓となる。トレンチのセクション調査を行った。
- 11月9日 曇 1号墳の前庭部を拡張 西側より西高校用地（矢印）を望む調査、3号墳墳丘測量と土塙墓実測を行った。
- 11月10日 曇 1号墳出土遺物の取り上げ整理、土塙より出土の遺物整理、3号墳トレンチ設定などをする。
- 11月11日 曇 1号墳壁面実測、3号墳墳丘表土はぎと伐採作業を行った。
- 11月12日 曇 1号墳の調査は完了し、3号墳発掘を開始した。
- 11月13日 晴 1号墳補足調査と3号墳発掘調査を行い、トレンチCとDを掘る。
- 11月14日 晴 3号墳発掘を行い土塙を発見した。E溝トレンチを掘る。
- 11月15日 晴 3号墳より須恵器が、周溝より須恵器片が出土した。
- 11月16日 曇時々雨 C・D溝の断面測量と3号玉石の排除及び周溝の発掘を行った。
- 11月17日 晴 3号墳の石室内の測量をし、周溝出土遺物を取り上げた。
- 11月18日 晴時々雨 新池対岸部にトレンチ設定した。断面図作成、3号墳内部の実測。
- 11月19日 曙 3号墳周溝の検出と測量、新池F地点の確認調査。
- 11月20日 晴 1号墳の保存について県文化課と打合せ、実物教材にするため、石室と屍床は県教委（西高）内に保存することになった。
確認調査は打ち切った。
- 11月21日 曙時々雨 3号墳のE Wのトレンチと周溝の実測をする。
- 11月22日 晴時々曇 トレンチの断面図を作成した。本日をもって発掘調査は完了した。



土塙と手前2号墳



西側より西高校用地（矢印）を望む

(西尾 幸則)

御 產 所 11 号 古 墳

第Ⅱ章 御産所11号墳の調査

1 古墳の立地

御産所11号古墳は、松山城勝山の西方の独立丘陵大峰ヶ台、岩子山、御産所とつらなる一連の丘陵地帯にある。この丘陵の南方の山麓に古照遺跡がある。これらの丘陵を半周する宮前川は旧石手川の河床とも推察される河川である。日あたりのよい南面及び東面の緩斜面一帯に遺跡は集中しており、地図1に示す埋蔵文化財の宝庫とも言える。とりわけこの地帯は、古墳の生産遺構をはじめ、東山麓の朝美町遺跡ではネズミ返し、木の盆、土器、加工材壁板、床板等を出土しており、伴出土器からみて弥生後期の住居址と考察できる。また、大峰台（133.3）の南斜面には、数多くの弥生時代の土塙墓及び住居址がある。とりわけ、頂上付近（75年度1部調査）には弥生中期の土器（文京1式）を伴出する高地性住居址を検出している。目を西南に転すれば、岩子山の山麓から中腹にかけて弥生式土器中～後期にかけての土器を探集している。その低地帯（沖積層）には（75年度調査）古墳時代の遺跡が発見された、西方の味生においても弥生中期～弥生後期後半に属する土器を多數探集している。

前述の宮前川は、国宝大宝寺をすぎ、丸山墓地から南流し、新たに河道は西に取り、更に、山王橋をすぎるころから流れを北にとり、松山港へと注いでいる。この川は当時の社会にとつては、かけがえのない程にすばらしい流れであったと思われる。松山平野に流れる河川の中で宮前川ほどに蛇行して流れている川は少なく、この河川に匹敵する河川としては、桑原より天山に注ぎ、小野川と交流する川付川程度である。筆者の知る限りでは蛇行している流れの川ほど、川岸に広がる集落は多く、しかも永住の地が多く見られる。このことは縄文時代においてもおおいに適合する。特に稻作文明においては、十分に理解できる前提と言えよう。なぜならば、これら河川の鞍部を利用しての水利是最も効率のよい結果をもたらしたことにはかならないからである。

これら社会的、経済的安住の地である、大峰台、岩子山周辺の人々の聖地としてもそびえ立った丘陵でもあり、現に大峰台よりの展望は松山平野随一である。

この両丘陵のおりなす分岐丘陵頂をはじめ稜線には数多くの祭祀遺構をはじめ、墓地（土塙墓、古墳）も造営された。その1つに御産所があり、岩子山、大峰台A・B遺跡が集中している。

2 古墳の調査

(1) 外形



第2図 御産所墳丘測量図

11号古墳は御産所(82m)の分岐丘陵の東方向に伸びる低丘陵の1つに築造せられた円墳である。この分岐丘陵には、かつては3個がそれぞれに大なり、小なりの墳丘をもった古墳があった。内一基は箱形の石室をもつ直径10m以下のものであった。現在では古墳の立地した丘陵でなく平坦な山形である。かつては丘陵の南傾斜面には、蜜柑園がつづき、北傾斜面には柿の木が植えこまれていた。

墳丘はほとんど開墾により、破壊されているが、墳丘頂を0としての等高線30cmで円墳の円形部分を示している。次にどのような規模か、また、どのような構造をなしているかの手掛りをつかまねばならない。そこで方位にトレンチを設定しAトレンチ平面距離3mとBトレンチ3mを観察した結果は第5図に示すものである。断面図に見られる如く11号墳も地山を堀り下げたことにより主体部の構築をなしたものと見るべきだが、地山への堀り込みが、他の古墳で確認しえなかったA・Bトレンチに堀り込みが発見された、いわゆる石室構築時の堀り方である。封土についてのたたきしめについては皆無に近いが、石積のひかえ部分はかなり入念に固められており、トレンチ堀りについても踏みしめ部分とは簡単に剥離をする状態にあった。なお、地山の傾斜からして陵頂よりやや下った立地に構築されたものと推察している。墳丘の北方面は既に土砂採集により20cm以上の地山の露頭となっている。

MP 2 御産所古墳群の分布図



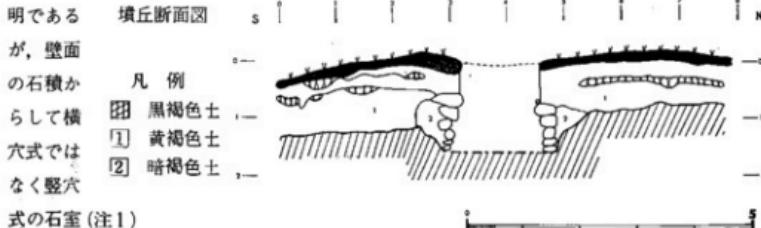
第3図 御産所古墳群の分布

(2) 石室の構造

石室は羨道部をもたない長方形の石室で、石室内部床面での計測値は奥行 2.8m 奥壁幅 1.6m 前庭部壁幅 1.44m とわずかに前庭部が狭くなっている。壁面の現在高は奥壁に向い右壁面高 1.35m 左壁高 1.01m 奥壁面高 1.01m 前壁面高 0.62m である。石室主軸の方位は N50°W、石室床面は大小の平たい塊石を上面を平にして敷き石されその上部に 3~5cm の川原石を敷き塊石の布石目詰めと床面調整を行なっている。

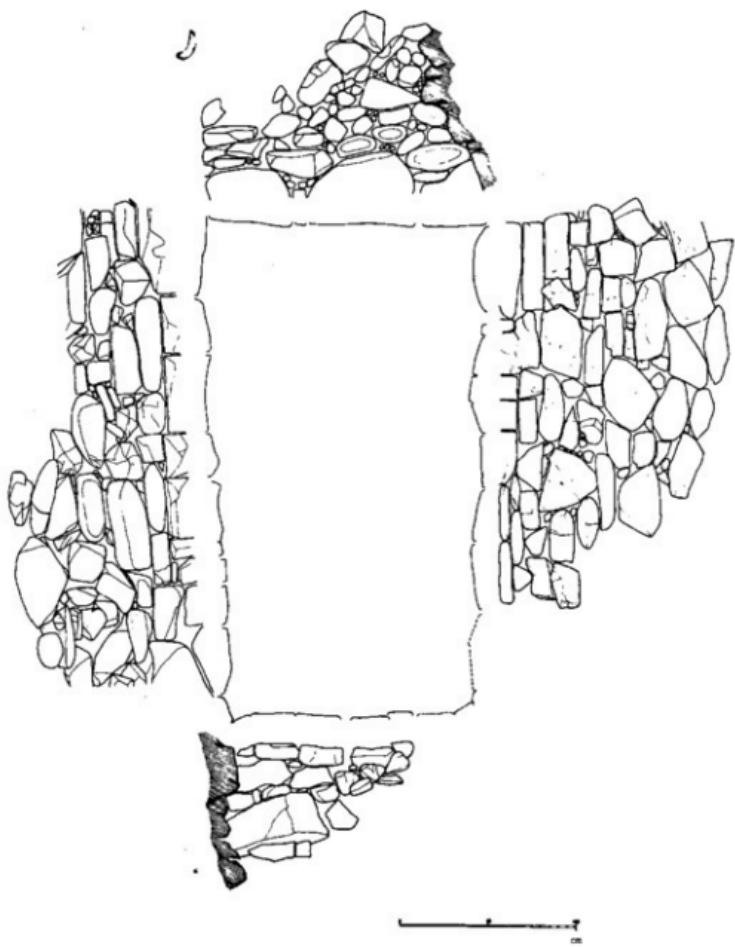
石積みの石材は自然の扁平石を利用したものが多く、材質は花崗岩と和泉砂岩を併用しており使用の比率は和泉砂岩が 8 割をしめていた。これら自然石を利用した石積みの方法は、扁平石の扁平面を活用した横積み方法をとっており、一隅には力石（まわし石）を配石している。腰石上に積まれた 2 段~3 段に積まれた長手の石と安定のある石材とを 2 様に積み分けている。その 1 例は腰石上の第 2~6 石の端部が隣り合う石材端部との境目が上部または下部の石材のほぼ中央部に位置するように積まれている部分と 1~2 段と横積みにしている部分がある。この石積に対しやや異なるものとして、奥壁面の石積がある。奥壁と前庭部もやや左右の石材よりおとり、しかも栗石混りの乱石積みに近い石積となっている。壁面のせり出しある右側壁以外はほとんど見られないところから右側壁のみ天井石横架後にせり出したものと思われる。天井石はすでにとり抜われ、皆無であるため不明であるが、一枚石を使用したものと考える。

角が山土採集のために崩壊しており、腰石のみを残すものであるため、羨道が存在したか否かは不⁺ 第 5 図



注. 1 松山市文化財調査報告書2

天山北・桜谷の報告に類例を見る。



第6図 石室展開図



第7図 人骨出土状況図と出土遺物状況図



第7図 人骨出土状況図と出土遺物状況図

と見るべきである。

御産所11号古墳の石室構造は当地方に見る後期の古墳の石積とは構築方法に若干の差異がある。腰石の使用を見れば立てて使用している石材と、横転させている腰石となっているものとの不統一な構築方法となっており、前庭部に位置する角には力石が使われているところや、壁面の崩壊部分にして第1石の基礎石は、他壁面の構築と相違しないところから竪穴式と見るべきだが、構築時期は後期への移行期とも見られるが前・中・後期とすれば、石室の構築から中期的要素が強い。この様式の初見は、桜谷古墳に類似する時期である。

3. 被葬者

11号墳において特筆すべき事項の1つに被葬者自体の問題提起がある。それは人骨の出土状況図1・2・3・4図に示す出土状況である。主体部は少くとも、一度は何時かの時代に乱壠され、その時点において遺体の移動及び破壊をした。そりしはまぬがれないまでも、出土状況図1に示す右側壁面の頭骨3個と歯牙の集中出土地点にも1個の頭骨があったとすれば、合計4個体の頭骨が安置されたことになる。次に出土状況図2図に示す頭骨は肩胛骨の下部より下顎を伴う頭骨が1個、さらに第3図に示す左側壁面により出土した歯牙の発見はこの位置にも1体考えられる出土状況であった。最後に第4図でみられる奥壁中央部にみられる下顎（歯牙は定着）と集中して出土をみた装身具の出土は、この場所にも1体葬られていたと見るべきであろう。左側壁に片寄って出土した装身具類も第3図の歯牙の発見位置と一致するところから1体を考えることがより妥当と推すれば被葬者総数は7個体を数えることになる。狹義に頭骨の出土数をもって被葬者数と解すれば4体となり、下顎と装身具の出土を1個体に数えるとすれば5体の被葬者数を同時にまたは追葬したことになる。いずれにせよ被葬者の最大数7人から最小数4人は確実な数値となりうる。

さて、この被葬者は追埋葬によるものか、同時に埋葬した重葬なるものかが問題となる。そこで、前述の石室の構造についてふれた如く、当11号墳の壁面の石積からすれば、狭道をもたない竪穴式石室である可能性は大であり、とすれば、天井石を開いて追葬するしかその方法は考えられない。竪穴式石室においての追葬例は筆者はいまだその初見も報告も知らない。とすれば最大数7体、最小数4人の遺体の埋葬は同時に被葬された重葬の可能性がより強くなる。次に一度に4人～7人の重葬を必要とする事態は何であったかが問題となる。残念ながら出土した遺体についての専門的な鑑定をいまだ行っていないので、十分なことは判らないが、ただ遺骸につきさきた平根の鉄鎌（出土状況図第1図、図版20）があり、この状態におかれたら人を考えると、男子の成人ではないかと推察せられる。また同図の頭骨2体にはあきらかに耳下から頭中にさきたままの刀子があり、前述の鉄鎌は骨盤を突きぬけ腹に矢先が1cm程度突出した状態であった。以上の事実を考察すれば、疫病による同時死亡者の被葬を考えるより、何等かの争い事による死者と考えることはできないであろうか。

（森 光晴）

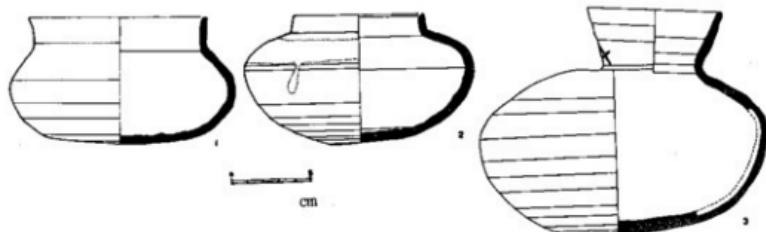
4 遺物

11号古墳における出土遺物（副葬品）玉類以外は、埋葬骨の出土状態からすれば、僅少であった。石室の構造でもふれたがすでに、天井石はなく流入土はかなり有機物が混入しており、以前にすでに乱掘された可能性が強い。被葬者は室内の中央部より奥壁面に埋葬され、前方部（前部）としての副葬品がある。須恵器の平提1、堆2が出土した後は土師器片と数片の須恵器片のみであった。その他の出土遺物としては、鉄鎌6、刀子2個、管玉15、丸玉97、白玉20個、耳環1個を出土した。

(1) 須恵器

短頸壺 (1・2)

口縁部の立ちあがりは、わずかに外上方へ直線的に伸びるもの(1)と、やや内傾ぎみに直線



第8図 須恵器実測図

的に伸びるもの(2)に別れ、端部は丸くおさめられ内面端部近くに1本の沈線があるもの(2)とやや水平に面をとっている(1)がある。(1)は口縁部がナデ調整されており、他は全面に渡って範調整し明瞭な棱が残っている。底部は平らな仕上げである。(2)は口縁部から肩部にヨコナデ調整により平らに仕上げてある。

頸部上面には釜印×がしるされている。胎土中は1.5mm前後の砂粒石の含有をなし、焼成は良好である。

以上が11号古墳出土の須恵器であり、(3)はTK-217型式に近いものであり、(1)(2)はTK-43型式～TK-209型式に概当し陶邑の報告にいう2期後半から3期初頭に近い時期とみられ、6世紀末～7世紀初頭におく事ができる。

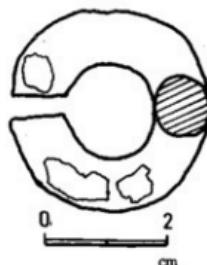
(2) 装身具

玉類

小玉 図第10図 (1-8)

いづれもガラス玉で、穿孔に傾斜のあるものが多い。

色調別個類は、水色の小玉21個、青色9個、黄色55個、暗青色12個 第9図 金環実測図



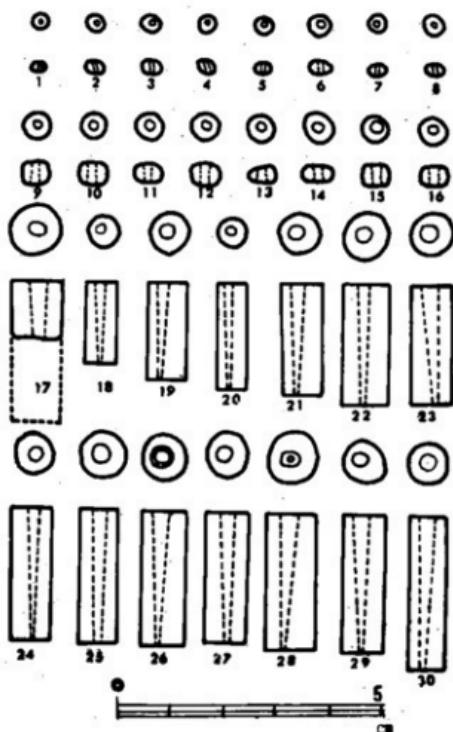
で計97個が出土している。

白玉 図第10図 (9-16)

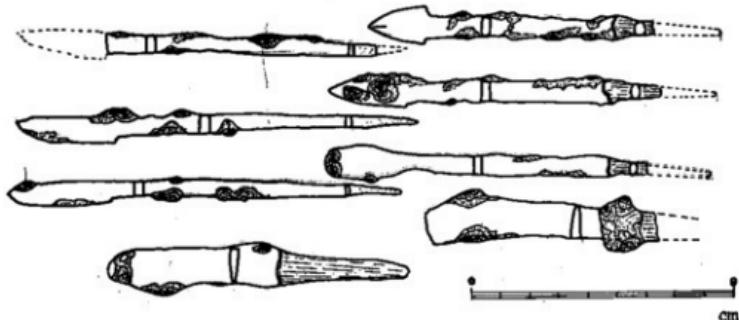
滑石製の白玉で、ほぼ同様の形状を示している同種の白玉は20個の出土総数をみている。色調はうす茶色を呈している。これらの白玉とほぼ同じ外径の測定値をもつ丸玉が7個出土している。

管玉 図第10図 (17-30)

全て碧玉製で、外径が若干小さい18.20を除いて暗青色を呈する。穿孔はいづれも一方向より穿たれた片側穿孔である。送りは26に確認できたのみである。同種の管玉はこの他5個存在する。



第10図 玉類実測図



第11図 鉄鏃と刀子実測図

小玉・丸玉・管玉の各部計測値は次表の如くである。

No.	外径	厚味	孔径	色調
1	2.90	1.90	1.1	7-19-5
2	3.04	2.37	0.4	タ
3	4.64	2.70	1.1	タ
4	3.11	3.00	0.5	タ
5	3.23	2.19	0.5	タ
6	4.85	2.71	1.1	14-17-6
7	3.23	2.90	0.5	7-19-5
8	4.03	2.8	1.2	15-17-3

No.	外径	厚味	孔径	色調
9	5.17	4.21	1.9	5-17.5-2
10	4.46	4.34	1.4	タ
11	5.12	3.30	1.7	タ
12	5.50	3.45	1.7	タ
13	4.89	3.38	1.7	タ
14	5.43	2.98	1.85	タ
15	4.69	3.99	1.6	タ
16	5.32	3.95	1.6	タ

単位 mm

No.	重量	全長	長径	孔径	短径	孔径	色調
17	1.8	10.41	9.5	2.6	9.5	2.6	16-11-4
18	0.9	19.28	6.8	0.8	6.31	1.85	12-17-2
19	2.4	18.43	8.9	1.5	8.32	3.0	16-11-4
20	1.3	20.90	6.20	1.65	6.20	1.65	12-17-2
21	2.7	21.40	8.5	2.6	8.25	0.75	16-11-4
22	3.6	22.35	9.14	2.7	9.13	0.7	タ
23	3.1	22.28	8.8	2.4	8.8	0.9	タ
24	3.0	25.10	7.45	2.25	7.45	0.75	タ
25	4.1	26.00	9.20	0.95	9.02	2.3	タ
26	3.4	25.00	8.38	2.65	8.25	0.75	タ
27	3.3	24.80	8.3	1.0	8.27	2.3	タ
28	4.6	26.80	9.41	2.45	9.41	0.72	タ
29	3.4	25.32	8.37	2.5	8.35	1.1	タ
30	3.5	28.50	8.14	2.4	7.43	1.15	タ

金環 第9図 図版第20

単位 mm, g

長径 3.3cm, 短径 3.2cm, 太さ 6.9cmを測り、重量は、11.2g である。断面はやや楕円がかかっている。錫化は進んでいるが、当時の金箔を僅かに残している。

3) 鉄器

(西尾、沖野)

鉄鎌 第11図

石室内部の左壁面の奥壁に対する前庭部において発見されたものである。鉄鎌の種類は3種に分類できる。その一つは腹扶片及び箭式(1・2・3)、その3は棘籠被丸造鋸式4.6cm、その3は丸造腹扶鋸式(5)である。鎌長2では13.8cm、3では13.6cmである。

刀子

2点出土しており、(1)は全長10cm、(2)は8cm、刃幅1.5cmでよく研磨され、長く使用され利器であったと推察できる。

その他

これらの鉄器の他に平根の鉄鎌1と刀子1個があるが鉄鎌が骨盤にささっているものと下脛にささっているものとは、ここではふれていない。

5 小 結

御産所古墳群における発掘調査は、現在まで報じられたものがない。主体部の構造で若干ふれた如く道後桜谷古墳と共に通し(註1)、竪穴式石室とも、横穴式石室とも断定しがたい石室の構築方法を取っている。11号古墳における腰石(第1石)は横積と縱積みを混入してはいるものの、第2段からの石積みはほとんど平積されており、6世紀中葉以後にはみられない平積みとなっている。なお、腰石の1部図版第2図・挿図第6図にみられる壞石を使用して腰石の不倒調整を左側壁で行なっている。玄門石はみられず第2段石が力石として積石されていることより、羨道部は構築されていないものと解されるが、前庭部にあたる地山は完全に発掘時点にすでに消滅しておりさだかでないが、前庭部と理解する遺構は残部地面においては把握できず、記述した石室構造からすれば竪穴式石室と見たい。

時期的には、他壁と異なって石室構築石材としては最大石の盤石を設計しており、当地方に見られる6世紀以後に普遍的に設計される形式である。

さらに副葬品からの時期的な考察をするならば、平瓶の出土例はTK-217に近似しており、6世紀末葉～7世紀初頭となる。さらにガラス玉の内ビース玉は80個を越えて出土しており、6世紀末葉の様相が濃厚である。古墳構築形式からすれば、横穴の家族墳が盛行する時期で、石室構築の推移とは逆行する構築方法といわざるをえない。

石室の内径は奥行2.8m、奥壁部長1.6mと小規模構築となっている。さらに被葬者の遺体はやや中央部より奥壁面に集中していることや、被葬者の遺体の一部には、南天に伸展された、手狭な埋葬となっており、頭骨位置からして見れば奥壁面より1.20mに五体を安置したことになる。さらに遺体の出土状況からしてもまた木棺を使用したものとすれば、釘を発見すべきであるが、釘は一本も検出することができなかった。以上の調査結果を総合すれば、なぜ追葬の困難な竪穴式構築方法を選定したかに問題点がある。将来を予見した追葬可能な墳墓の流行期であることから、この追葬を意味嫌った葬者等の願望を封じ込もうとしての主体部設計と見たい。また被葬者主体にも腰にまた脛に鉄鎌・刀子の少なくとも刺ったままの埋葬と見られる。頭骨位置を埋葬時の位置そのものとは断定しないまでも、前庭部より奥壁まで移動したことは調査結果(遺骨は奥壁面よりの計測で2.0mを出ない)からは検出できなかった。

以上の諸条件を総合すれば一時期に埋葬を必要とした重葬としか考えられず、副葬品から見る限りにおいて、6世紀末葉ないしは7世紀初頭に、当地方で何等かの人災の生じたことによる重葬形式を取らざるを得なかつたものと理解している。

註1 報告書 天山 桜谷古墳 市教委

(森 光晴)

忽 那 山 古 墳

第Ⅲ章 忽那山古墳の外囲遺構の調査

1 古墳の立地

忽那山古墳は3基の円墳の残欠を確認しているが、発掘経過でふれた如く忽那山は戦時中に軍事的要地として、丘陵といわば、山頂にも又山腹にも塹が掘りめぐらされた所であるために、遺構そのものはかなり破壊されつくされていた。

当丘陵は、弁天山丘陵の一部に含められる残丘であるが、伊予灘に突出し、周辺部の埋立地区となる以前は、海浜に孤立した島状残丘であったものと考えられる。地山の地質は花崗岩系に属しており、弁天山、岩子山、大峰ケ台の残丘と同地質である。残丘は金山にツタカツラが繁茂しておりその内に松が、残丘を美しく飾っている。

円墳は、稜線上に造られており、いずれも10m以内の小円墳である。

山頂部には、当残丘最大の円墳が構築されているが、前述の条件により、完全に破壊されてしまい、原形をたどることすら困難である。

第2号墳は中腹部の稜線上に構築されていたがそれもまた、弾薬庫等の施設を造くるために壁面の石積はことごとくなく墳丘のみ残るのみであった。しかしこの地域ではかつては石鎧や、土師式、弥生式土器片を探集したこともあり、当地区的開発に先行して発掘調査を実施した。残す第3号墳は、東法面につぐ北法面を掘削したために、発掘計画し調査を実施するまでに集中的豪雨の襲うところとなり、北面方向に地すべり現象をおこし、調査をまたず転落のうきめをみた。

+

第12図
遺跡位置図

- ① 忽那山
- ② 御産所
古墳群

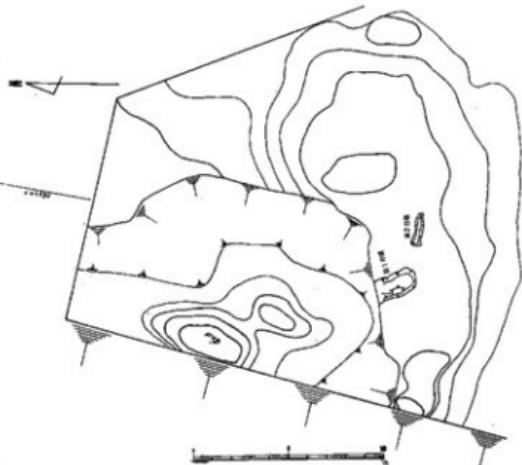


1
50000

2 古墳の外囲の調査と遺物

(1) 主体部

忽那山古墳の主体部は、落
下時点で石室は完全に転倒し、
下部と上部が逆手になった状
態をなし、しかも掘削斜面の
地すべり中に生じた破壊活動
により、古墳の一部分のみの
調査、しかも上下逆の調査と
なり、自然の業によるものと
自戒しつつも、破壊を誘発し
た開発工事と、それに加え、
文化財保護意識の低調のもたら
せた結果と言わざるを得ない。
図第13図に示す墳丘測量
図にみられる中央部の鞍部が、
前述の地すべりの亀裂落下と
企一したことにもなり、調査



第13図 墳丘実測図

対象を目前にして喪失をみた遺構は筆者は初体験であり、残丘遺構の調査を続行した悪夢的体験は今日に至っても、その遺物1点を見るにつけても忘れ得ない、将来への唯一の教訓としてよみがえる発掘調査となっている。

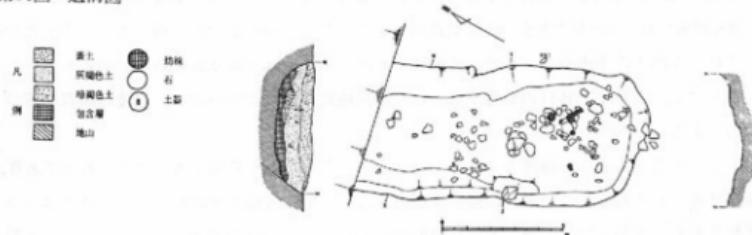
残欠の主体から推察すれば、主体部は横穴式石室で、壙石はほとんどなく、よく磨滅した自然石をもって石積されていた。石材の石質は、和泉砂岩系と花崗岩系の二種に大別される。腰石となる第1石は縱て方向に立てられて、その上段からは、横積されていた。

(2) 遺物

主体部内部からの出土遺物（採集遺物） 第15・16図

丸玉（ガラス製）9個、内黄色1、緑色2、管玉1、勾玉1（1部欠損）、耳環1個（渡金）と鋳化がはげしく人骨と溶合した一塊の遺物があるが、現在その1部分を分離できない状況で細分を示めに至っていない遺物塊の中から図第16図の13留金具の一種を発見した。現在長4.8cm、花弁部直徑3.3cm、花弁上部の渦状付着（被装部？）物高2cm着装部の柱状体の長径2.2cmで、その端部はカシメの痕跡が認められる。花弁は6弁で花状は梅花状である。
(森 光晴)

第14図 遺構図



(3) 外周で検出された遺構

円墳の亀裂面に露出した層序を手掛りとして、発掘を行なった。土塙1は(図第14図)に見られるもので、土塙の掘り込みは地山を-50cm掘り下げている。出土遺物はほとんど見られなかつたが、土器の細片は多く、その大半は土師式土器片で計測は不可能であった。

図中のBは土師式土器の完形品である。

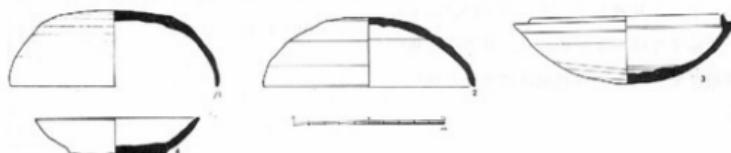
須恵器

・ 环 (1・2)

(1)口縁部の立ちあがりは、外上方に直線的にのび、端部はやや内弯し丸くおさめられている。内面と口縁部から体部にかけてはナデ調整であり、底部はヘラ調整により、平らに仕上げている。内面の底面に粘土帶つみあげの痕跡が認められる。胎土中には1.3mm前後の砂粒石の含有があり、焼成は良好である。

(2)は蓋であり、口縁部はナデ調整されており、天井部及び体部はヘラ調整し、天井は丸く仕上げている。他は(1)に同じである。胎土中には0.5mm~1.8mmの砂粒が多量に含有しており全般的には粗い仕上げである。

(3)は环身であり、(2)とセットを成すことが考えられる。口縁部の立ちあがりは退化しきわめて短くなってしまっており、やや内上方へ傾斜しつき出しているものである。受部は、やや外上方に短くのび端部は丸くおさめられている。口縁部から内面にかけてナデ調整が行なわれている。体部から底部にかけては、ヘラ調整し底部を丸く仕上げている。(2)に同じく砂粒が多量に含有し、全体的に粗い仕上げである。以上が忽那山古墳より出土した須恵器であり、(1)(2)



第15図 須恵器実測図

(3)は陶邑の調査で明らかにされたTK 218型式に並行する時期であり、第Ⅲ期の初めにあたる7世紀初頭におくことができる。この型式については久万ノ台1号・3号に継ぐものと考えたい。これらの出土の須恵器を含めて、当地域における窯跡の成立期及び拡散期に当る6C~7Cにかけて、まだまだ独自の形態が考えられ、系統的なものについては、今後の調査を待つものである。

(4)は土師皿である。口縁部の立ちあがりは、少し内湾しながら外上方へのびるものであり、端部は丸くおさめられている。口縁部及び内面はヘラ削り後横ナデ調整であり、体部はヘラ調整である。底部には、明瞭に糸切りの痕跡があり、さらには内底面にはロクロによる調整痕がある。胎土中においては0.3mm~0.8mmの砂粒を含有している。ロクロ回転は左である。出土場所は石室の外の2次遺構と思われる所より出土したものである。 (西尾幸則)

石器 第16図 (1) 図版・21

石材は緑泥片岩で、全長12.8cm、幅5.5cm、厚さ0.8cmの長方形の石包丁で、破損品である。上面には使用による磨滅が見られ、背面は全面剝離面となっている。刃部には研磨による調整が行われている。また、穿孔は持たず背部に孤状の抉り込みが見られる。背幅12.8cm、刃幅10.4cmと刃幅は背幅に比して小さい。両端はゆるやかに内弯している。

石 錄

亜サヌカイト製の打製凹基無莖石錄である。長さ2.3cm、幅2.0cm、最大部の厚さ3.2mmを測る。重量は1.4kgである。

金 環 第16図 (3) 図版 21

長径3.6cm、短径3.2cm、太さ1.0cm、重量31.5gを測る。当遺跡においてはこの1点のみである。銅環に金箔を包んでいたと思われるが、銅環を残すのみである。

装身具

玉 類

小 玉 第16図(4・5)

共にガラス玉で、色調は4が水色、5は黄色を呈している。4は不整形な器形をしており底断面は傾斜し、また外径に比して孔径が大きく、全て濃青色の色調を有するガラス玉である。6・7・8の器形は各々異なるが、底断面は水平面と共通している。9・10はいずれもやや扁平な球形をしており、9の穿孔角には傾斜が見られる。各計測値は下表の通りである。

No.	外径	厚味	孔径	色 調	重 量
6	6.93	5.67	2.0	16—15—4	0.4
7	7.01	4.31	2.3	タ	0.4
8	7.46	6.05	1.4	タ	0.6
9	10.01	7.24	2.1	タ	0.9
10	10.32	8.07	1.8	タ	1.2

単位mm, g

管 玉 図16 (11・12) 図版21

11は暗青色のガラス製管玉で、両端は丸くおさめられている。さらに穿孔角には傾斜がある。12は淡緑色の碧玉製のもので、研磨は良好である。

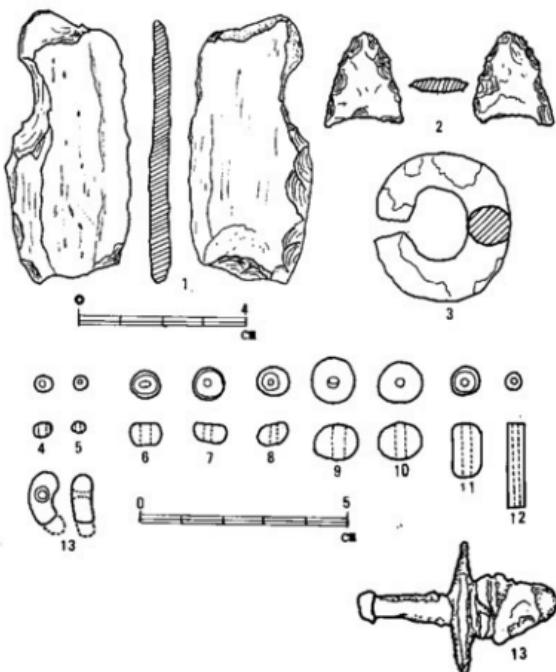
No.	全長	長径	孔径	短径	孔径	色調	重量
11	11.83	7.25	1.5	7.25	1.6	16—11—4	0.9
12	25.16	3.99	1.6	3.43	1.65	12—16—4	0.6

単位mm, g

勾 玉 図16 (13) 図版21

色調は水色を呈しており、石材は瑪瑙と思われる。腹部には廟首状の抉り込みがあり、背部には丸味を持たせている。断面形はやや歪みを生じており、尾部は欠損している。計測値は、現存長さ1.28cm、幅5.56mm、厚さ5.45mmで重量は0.7gである。

(沖野 新一)



第16図 石器と玉類

久万ノ台古墳

第Ⅳ章 久万ノ台古墳の調査

1 古墳の立地

久万ノ台古墳群が所在する久万ノ台残丘は、15～20mの標高を有している。台地面は起伏に富み、台地は南北に細長く伸びている。古墳群は新池及びそれに隣接する丘陵部を中心として分布を見るが、これらは旧久万川の鞍部によって、南側の衣山古墳群、北に東山町古墳群とに分けられる。

次に久万ノ台古墳群の周囲に見られる主要な古墳について、その概要を記すことにする。

長谷奥古墳

＜築造年代＞～六世紀前半

＜形状・規模・内部主体＞

円墳・直径21m墳丘2.5m、石室は主軸をS68度Wに取り、巾1.2m、奥行3.6mの横穴式石室で天井石、奥壁、北側壁は殆んどの石を失っていた。南側壁（残存高1m）と玄室の閉塞石の大部分は残っていた。羨道部は造られた形跡がない。

＜出土遺物（副葬品）＞

鉄製品、直刀1、鉄矛1、刀子2、鐵鎌1、農工具（U字型の鋏先）1、施、馬具、轡1、辻金具、瑠璃色ガラス製丸玉53個、須恵器、提瓶1、壺3、台付壺1、蓋付1、高杯を発見している。

衣山古墳群 永塚古墳

築造年代 6世紀前年

形状・規模・内部主体

「古墳の規模は全長19.1m、後円部径9.4m、同高2.3m、前方部巾5.8m、同高0.8mである。主体部は後円部において主軸に直交した石室の一部が残存している。出土品は明らかでないが、周辺部で須恵器、筒埴輪片を採集している。」

古代学研究 36号 愛媛県における前方後円墳より抜粋文であり、私の知る限りでは前方後円墳としては把握できないが、直径10m内外の円墳が群集しており、箱式石棺と横穴式石室との比率は折半している。

2 1号墳の調査

(1) 1号墳外形

久万ノ台古墳群は、戦前、戦後にかけて、森林から竹林へ竹林から果樹園へと開墾が進め

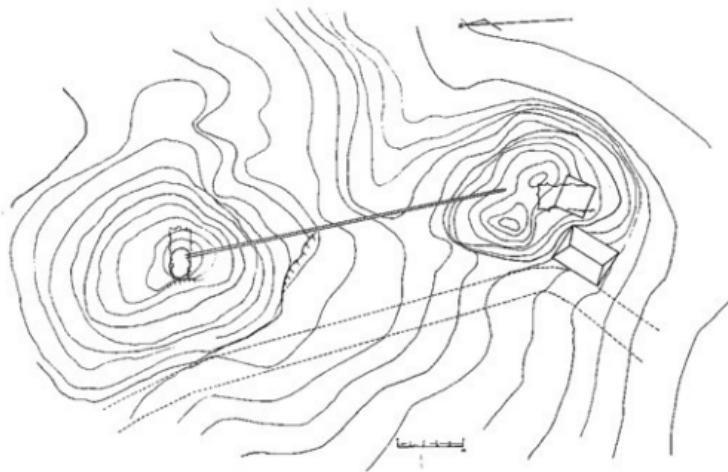
られており、これらの開墾により丘陵全域の遺跡はことごとく半壊または全壊しているものが多い。さらに丘陵の北斜面をはじめ各所は瓦土及び練瓦土用に採集され凹地をつくっている。ちなみに1号墳は墳丘及び天井石も取り除かれ、石室内の整地を行なったうえ、玄室の直上に冠水と消毒に使用するためのコンクリート水槽が造られていた。第2号墳は完全に近い程に墳丘はもちろん壁面の積石はすべて取りきられ、僅かに床面の玉石と1個の鉄鎌片を発見したにすぎなかった。第3号墳も1、2号墳と大同小異であったが、戦前にビワの木が植えられ50年に近い樹令をかさねているだけに発掘は困難をきわめた。

古墳外形の調査は、墳丘の測量および墳丘の封土状態を知るためにトレンチを設定したが、果実の集穫時期と重なったこともあります、発掘計画をしばしば変更させざるをえなかった。

地形測量の結果、墳丘頂を0とした場合第1号墳では、等高線1.5m付近で、本墳は円墳であることを測りえた。その後収穫完了をまってトレンチ調査を実施することとし、トレンチ棒で石室の探索により水槽の直下にあることを確認した。

(2) 石室の構造

石室は、羨門部が欠損しておりさだかでないが、石室の壁面石積みも崩壊して、内部には床面まで1.5mの高さに土砂が堆積していた。流入土の除去とともに奥壁に向って左側の壁面石積が内弯し崩壊の危険が生じてきた。

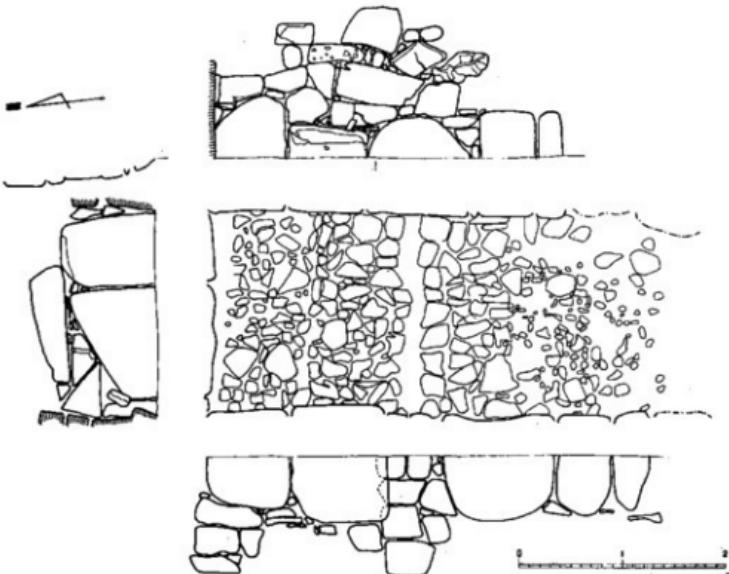


第17図 久万ノ台墳丘実測図

土砂排除の結果、前庭部および狭門付近はまったく破壊されていた。石室内部の土砂の堆積は床面部上に僅かに荒されていない部分が残されていた。石室の形態は、草室の横穴式石室で床面は長方形で主軸を N5°E にとっている。狭門部の構造は不明であるが、現長の玄室端が傾斜面に露出する状態からみて、狭道部は構築されたとしても、閉塞口をかねもつ程度の構造であったと推察される。したがって横穴式とはいへ、横口式石室に近い構築方法を取っている。（玄室は地山をこの深さだけ掘り込んで構築していることとなる。）

玄室の規模は、奥行 4.8m 幅が奥壁部分で 1.9m、狭門側で 1.9m、天井高は不明であるが現在高 1.5m を計測できしたことより、天井高は 2 m を越えるものと推定する。石室床面は大小の平たい川原石をもって、3 区画して敷石されており、その敷石の目づめとして 3~5 cm の玉石が敷石されていたが、狭門側約 1.8m は地山に簡単な玉石を敷石したものであった。

石積みの方法は不整形の大形石材を腰石として立てて使用し、その上部に 2~3 段ほどやや長手の壊石を平積みしたあと、栗石で目づめと土居を取りながら方形に近い形状の石材を少しづつせり出させながら積み上げている。腰石の上に積まれた 2~3 段の長手の壊石部分は隣接する石材との境目が下位あるいは上位にある石材のほぼ中央部にあたるように積まれており、それより上部にある栗石混りの石材は、いわゆる乱石積みと呼ばれるものに近い積み方である。壁面の交叉する部分でのまわし石（力石）はなく、奥壁面では垂直でせり出し



第18図 石室構造図

はなく両側壁よりの持ち送りとなり、広く松山平野でもちいられている後期古墳に共通するものである。壁面のせり出しあは遺存状態のよい左壁で(1.50m)測って約25cmである。使用石材は和泉砂岩である。

(3) 埋葬主体

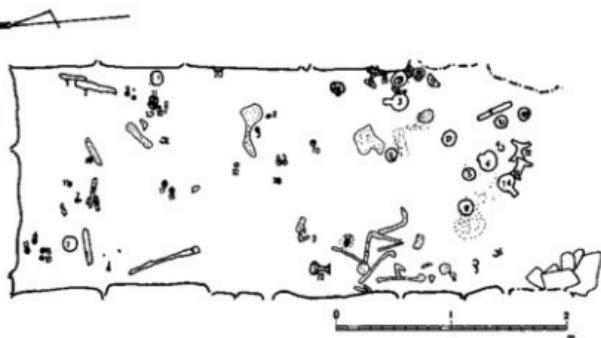
床面に礫岩を入念に敷きつめ、その礫岩の目づめとしての大小の礫石で平坦な礫床を造っている。埋葬主体は3区画された礫床に東西方向への伸展葬が3体と狭道及び閉塞口に近く両側壁面に偏して1体(歯牙の位置から北を枕にしている)伸展埋葬されているものとが確認されたが、奥壁面に平行してへつらえられた敷石面にも遺体は安置されたものと考えると、敷石から推察する限り、最後の追葬者のみ、前葬者の埋葬より安易な方法となっている。

この追葬からしても家族墳として永く利用されたものであろう。このことについては左側壁において見られる遺骸の攪乱状態からみて、追葬のための遺体整理を行った痕跡とも見られるが、閉塞口付近は前述の如く開墾による封土の流失により、腐蝕喪失したものと推察すべきであろう。

第19図
埋葬遺体・
遺物出土状況図

凡例
■ 骨片
□ 骨

+



(4) 遺物の出土状態

1号墳はすでに開墾時に遺物を採集したとの所有者よりの連絡をうけた。調査の結果は図第19図に示す遺物出土状況⁷あり、遺物はすべて石室内においてのみ発見された。

須恵器 高环3 長頸壺2 増5

壺 無蓋脚付壺2

鉄器 直刀6 刀子1 品1

装身具 ガラス丸玉 銀環6

石室内部の出土の特色として、須恵器は壺1と右側壁中央部での壺2以外は2群に分かれて発見された。長頸壺No.2で発見された頭骨遺体片と骨片の集中出土付近と閉塞口中央付近での集中出土とに分けられる。

(森 光晴)

3 一号墳の遺物

(1) 須恵器

环蓋 第20図(1)

天井部は丸くふくらみを持ち、全体にへラ削りをしている。口縁部は、直立ぎみに開き、端部は丸くおさめられている。天井部以外はヨコナデ調整の仕上である。内面には巻き上げ痕が見うけられる。胎土は良好で砂粒石の含有は少ない。

No.	器高	口径	色調	ロクロ回転
1	4.1	13.1	内 0-17-0 外 0-16-0	右

环身 第20図 (2-6)

口縁部のたちあがりはいずれも内方へ傾斜し、その長さは 1.0cmから 1.3cmである。端面は丸くおさめられている。受部は外上方に伸び、端部は丸くおさめられているもの、(2,3,5,6)と、水平に伸びている(4)がある。底部は扁平ないし、丸く仕上げている。体部から底部は丁寧にへラ削りを重ねており、その方向は順回りである。胎土、中には 0.9mm前後の砂粒を含んでいる。焼成は良好である。

No.	器高	受部径	口径	色調	ロクロ回転
2	3.9	15.6	13.2	0-16-0	右
3	3.6	15.0	12.9	タ	右
4	3.8	15.4	13.4	タ	一
5	4.0	14.1	11.8	0-18-0	一
6	4.5	15.0	12.3	0-16-0	右

無蓋高环 第20図 (7-10)

(8)の环部口縁はやや外反し、脚部をのぞき全体に丁寧なナデが行なわれている。(9, 10)は外上方へ直線的に伸びるものである。(9)の口縁部の稜からの立ち上がり面は顕著であり、体部に明瞭な稜線の区別がある。(7, 8)の脚部は短かく、中空で脚縫部は大きく外方へラッパ状に広がっている。(7)は脚端部において段を有し、(8, 9)は端部を上方に持ち上げ直立するものである。(9)の脚部には2方に長方形の透しが2段にあり、脚の中央部には2本の沈線がある。(10)は、3方に長方形の透しが2段にある。(7, 8, 9)の焼成は良く伽のみ生やけである。

No.	器高	口径	脚高	縫径	环高	色調	ロクロ回転
7	現在高 3.9	—	3.2	10.4	—	0-16-0	—
8	7.3	12.5	2.6	8.5	4.4	タ	右
9	14.0	12.3	9.9	10.4	4.0	タ	—
10	現在高 13.6	16.3	—	—	4.7	0-19-2	—
11	17.5	13.3	12.9	14.6	4.6	0-16-0	右
12	16.5	13.1	12.6	14.9	3.8	タ	右

有蓋高环 第20図 (11, 12)

环身に脚を付けたものである。环部の底部は丸くおさめたもの(11)と平らに仕上げたもの(12)がある。口縁部の立ちあがりはいずれも内傾し、受部はいずれも外上方に伸び端部は丸くおさめられている。脚部は中空で脚縫部にいくに従って大きく外方へラッパ状に広がり、脚端部においてへラ調整し棱となすもの、(11)端部を上方に持ち上げられ直立におさめられている

もの(12)両者の変化が見られる。脚部にいずれも中央よりやや上部に(11)は1体、(12)は2本を施されている。(11)の环部脚部は内外面共、全面に渡ってなでて丁寧に調整してある。(12)の环部内面は丁寧なうなで調整であるが、环外面から脚部は粗い仕上げである。両者は明らかに、胎土の差異がうかがえる。透しは両者共に2方の長方形の透しが、2段であり、焼成は良好である。

壺形土器 短頸壺 第20図 (13~19)

頸部から口縁部への立ちあがりがわずかに外反するもの(13, 14)と、直口するもの(15~18)くの字形に外反するもの(19)の3形態に分別できた。底部はやや平らに仕上げているもの(13, 14, 17)と丸く仕上げているもの(15, 16, 18, 19)がある。(13, 14)は体部から底部にいくに従って急激に厚く仕上げてあり、

(16~19)は徐々に厚く仕上げている。頸部以下がほぼ同じ厚さによって仕上げるものがある。口縁から体部にかけていずれもヨコナデが行なわれており、体部から底部にかけても、ヘラ削り後丁寧なナデ調整がみられる。(18)のみは体部から底部にかけてヘラ調整で粗い仕上げになっている。体部の内背部分に顕著な稜線が見られるもの、(13, 15, 16)一条の沈線を施すもの(16)と、2条の沈線を施すもの(17)がある。(15, 17)の口縁は梢円形をなし、他はほぼ円形である。(13~15, 17~19)の内面は丁寧なナデ消しがみられ、16は一部粘土紐巻き上げ跡がみられる。(15)は重ね焼きにより体部から頸部にかけて、口縁部に有蓋環の端部の付着がみられる。蓋をして焼成したものか？(15, 16, 18)が有蓋短頸壺で他は無蓋である。

長頸壺 第20図 (20, 21, 23)

台付 (22, 24)

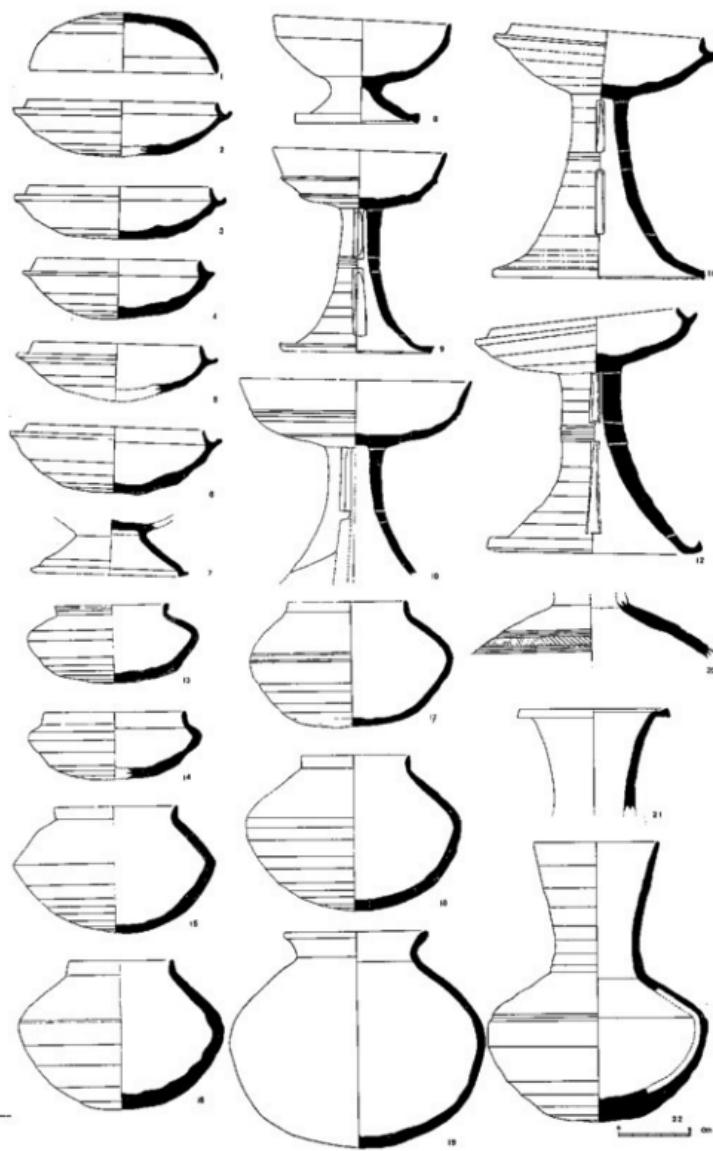
口頸部は細長く、上方にゆるやかに外反し伸びており、口縁端部は丸く仕上げるもの(22, 24)は口縁端部を外へ一且、屈曲させ、先端は直立になるもの(21)が大別できる。(22)は肩部と胴部との境界に

No.	器高	口径	頸高	胴径	色調	ロクロ回転
20	現存高 4.1	不明	—	—	0-15-0	—
21	現存高 6.9	10.3	—	—	0-15-0	—
22	19.6	8.7	9.0	15.1	0-15-0	左
23	現存高 10.5	—	—	14.3	0-15-0	—

凹線をめぐらし、(23)は2本の沈線をめぐらしており、さらに(20)は胴

No.	器高	口径	脚高	裾径	胴径	色調	ロクロ回転
24	26.5	8.3	6.3	13.4	15.7	0-16-0	右

上部に4本の沈線をめぐらして、沈線の中間にはヘラ描きによる右下りの斜線文を施してある。(22, 23, 24)は頸部立上がり面より、外面肩部に重るまで丁寧なナデ仕上げである。胴



第20図 須恵器実測図

部から、底部にかけてヘラ調整をなしている。22は当初の製作過程においては台付であったものであり、底部には脚があった痕跡を示している。23の底部はヘラ調整により、平らに仕上げてある。24は短かい台脚があり、脚部は3方に細長の台形状の透しをめぐらし、脚裾部にいくに従って外方に広がっており、脚部中央の内背部はヘラ調整により稜となし、さらに1体の沈線を施している。端部はやや外反し、丸く仕上げてある。(西尾幸則)

(2) 装身具

玉類

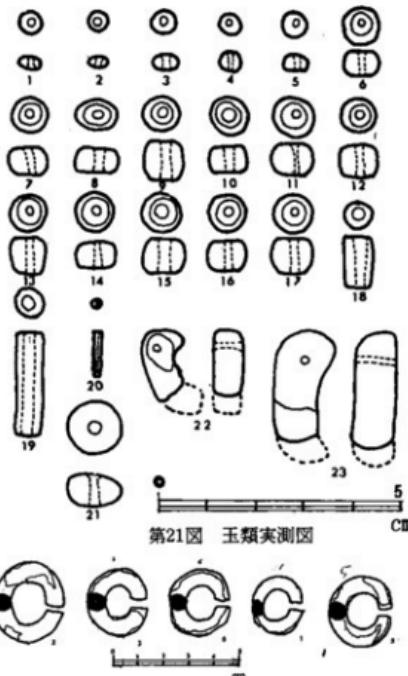
小玉 第21図(1-4)図版()

ガラス玉で、1の黄色と3の水色を除いて暗青色を呈している。小玉は合計7個の出土がみられた。

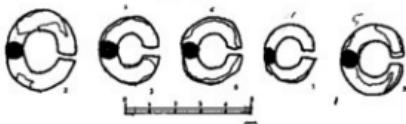
丸玉 第21図(5-18)図版()

大きさに違いはみられるものの、ほぼ同形をした暗青色の色調を有するガラス玉である。この他に同種の丸玉が3個出土している。下表は小玉及び丸玉の計測値である。

	No.	外径	厚味	孔径	色調
小玉	1	4.63	2.86	1.4	7-19-5
	2	4.88	2.49	1.3	16-11-4
	3	4.28	2.54	0.6	15-17-3
	4	5.13	2.63	1.1	16-11-4
丸玉	5	7.05	4.63	1.3	16-11-4
	6	6.23	4.90	1.95	タ
	7	6.55	4.34	1.3	タ
	8	6.84	3.33	2.2	タ
	9	6.88	4.70	1.3	タ
	10	7.16	4.64	1.3	タ
	11	7.11	4.51	0.9	タ
	12	5.44	3.98	1.1	タ
	13	8.54	5.62	1.85	タ
	14	7.11	3.72	1.6	タ
	15	7.26	3.28	2.0	タ
	16	5.86	4.19	1.3	タ
	17	6.49	3.97	2.5	タ
	18	7.05	3.31	1.9	タ



第21図 玉類実測図



第22図 金環実測図

金環 第22図

いづれも銅環に金の

鍍金を行ったもので、出土総数は5個である。

1個を除く4個は鋳化が進み、金箔の殆どを失っている。計測値は左記に示す如くである。

単位cm, g (沖野新一)

長径	短径	太さ	重量
3.2	2.7	0.8	20.4
2.8	2.2	0.7	12.0
2.7	2.4	0.7	11.7
2.1	1.9	0.5	3.1
2.9	2.5	0.7	12.5

(3) 鉄器

武器類 第23図 図版25

直刀を第1号古墳において4振、短刀1振を発見している。これらの武器は、そのほとんどを死床から発見している。(第23図)これらのに推定2振分の直刀身と思うものがあるが、全長を明らかにし得ない。鞘の木目の鋲着を見るものもある。鞘は、柾目の鞘の木質痕を留めている。

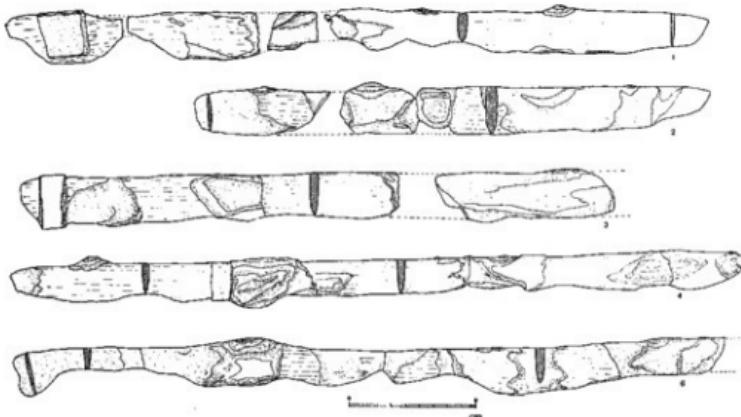
直刀1、刀身長 間から芒子までが鋲化して不明であるが間から芒子までの現在長43.5cm 現在中莖長 6cm、関部身幅は鋲化しており不明である。また莖の鋲化いちじるしく、目釘穴は不明である。平造りの大直刀で、腰でやや内反り気味である。刀身に柾目の鞘の木質痕を留めている。莖部分にハバキ的な遺物が付着している。

直刀2、刀部の現在長40cm、ハバキが間と莖との境にはめているが、間から芒子までは鋲化がはげしく不明である。刃関部分を欠損しているため大刀長は不明である。鋲はみられず平造りの大直刀といえる。刀身幅 3.1cmで鞘の木目が鋲着している。

直刀3、刀身長51cm、間から先まで36cm、棟厚 0.6cm、刀身幅 2.4cmの平造りの大刀である。目釘穴は鋲化がはげしく現在の時点では不明である。レントゲンの使用を考えている。

ハバキの部分は特に鋲化しているが、刃間があるものと推察される。

直刀4、刀身現在長は50cm刃関部分を欠損している。ところどころに木目(柾目)の鋲着が見られる。直刀1、2、3と異なるものとして特に、間と芒子の莖の細身と莖端部における造りを、筆者は目釘穴に代行する造り出しであると見ている。棟厚 0.6cm、刀身幅 2.6cm であり、莖中間部の身幅 1.4cm、端部幅 3.1cmと打ち広げられている。



第23図 直刀実測図

短刀 1, 刀身長36cm, 中莖長17cm, 刀身幅3.2cm, 棟厚 0.6cm, 関部分は不明である。目釘穴はもっていない。

刀子, 刀子は2点出土しているが, いずれも破損しており全身長を計測できない。1個は柄の部分は鹿角を使用しているものがある。

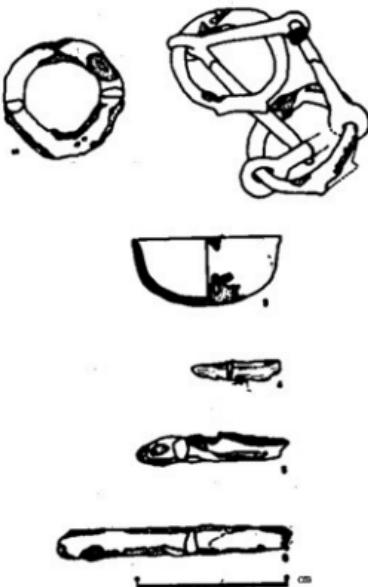
馬具類

クツワ(轡) 楕円形鉄環の扁平部に長方形の面繋止の金具が一体に作られた, 鐙板に喰金具の輪と平金具の輪が連結されている。
いざにせよクツワはひどく鏽化が進行しており, 平金具の輪は欠損している。

(4) その他の鉄器

当玄室内での発見遺物の中で, 不明の鉄器類が若干みられる。その1つに鉄製の椀状の遺物が見られるが現時点では用途その他不明である。床面の屍床の入念なる調査にもかかわらず釘等の鉄材を発見することはできなかった。屍床の川原石の下部は礫岩の平坦面の配石となっていたが, これらのすき間に釘を発見することはできなかった。この実例は裸葬に直接関係するものとは推察できないまでも1つの問題提起となる。

(森 光晴)



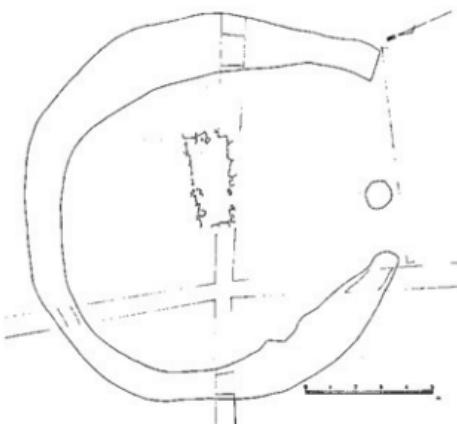
第24図 鉄鎌と馬具の実測図

4. 3号古墳の調査

(1) 外形

3号古墳は, ビワ園の中に僅かに残された直径約15m内外の墳丘が認められた。地形測量の結果, 墳頂部を0とした場合の等高線約-2.0mまでを範囲とした。この等高線からの推定できた東部の突出部は, ただ開懸時の平坦面と考えるより, 樹木がビワであることからもかなり原形をたもっている。とすれば, 主体部に対する第2次の造構へと発展する可能性が強まる。つぎにどのような規模であるかその手掛りをうる必要から, 東西にトレチを設定し地層観察をしたが, 基盤をなすいわゆる地山は(にぶ黄橙6-17-14)黄色の粘質土が主体を示めるが, 東斜面においてはこの地山層(うす橙4-18.5-4)帶赤の黄色の粘質土が

シマ状に南北に歩行している。この地山に黄茶（6-16-3）が30~40cmの層厚で花崗岩の風化層序となっておりその上部に火山灰性の黒色細砂土をわずか盛っている。この層の上部は、表土層となっており、盤築の状態は把握することはできず、封土の残欠を確認できたにとどまった。設定したトレンチのうち地山の変化のみられる堀り込みが主体部を中心に東と西とで確認された溝状造構をこの古墳をとりまく周辺とするにはやや貧弱すぎる感じはまぬがれないが、本墳の規模からみて当地方では初見の造構である。



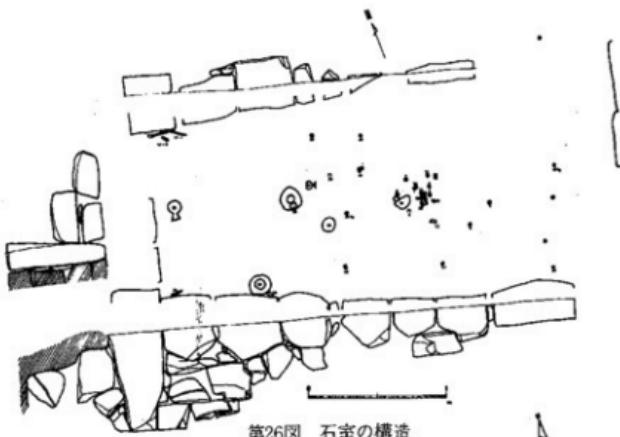
第25図 主体部と周辺平面図

(2) 石室の構造 第26図

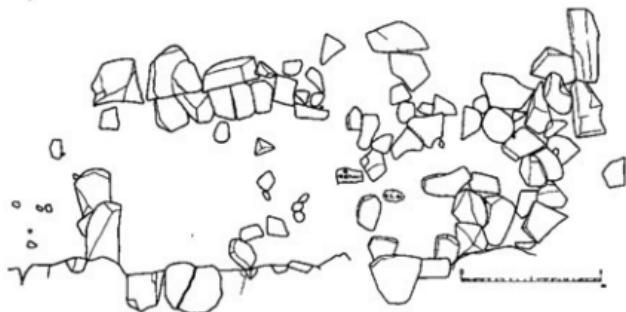
石室は羨門を構成する袖石が、奥壁に面して右側は立石により区画しているのに対して、左側においては、腰石をわずかにはみ出して区画している。石室の構造は、右側壁の玄門部の4段の石積を残す以外は、そのほとんどが、取りはらわれ、奥壁周辺は腰石まで抜き取られて2つの石を残すのみであった。

石室の形態は、羨道部の退化した単室の横穴式石室であり、いわゆる（只）字形石室と称されるものである。羨門の外側は通常の横穴式石室にみられるような天井石を横架構造はもたずに、玄門部より約70cm付近より地山を堀り下げ、3~4段の石積を行ない簡単な玄室への通路としたもので狭義の墓道と呼んでいる。羨門部分の構造は、65×100cmの空間を造り出していて、玄室へは2段約50cm降りて入らねばならない。したがって玄室は地山をこの深さだけ掘り込んで構築することになる。

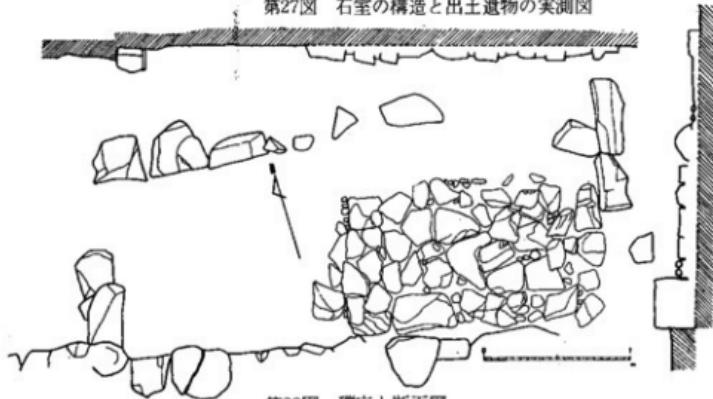
玄室の規模は、羨門部で1.2m、奥壁長1.70m、奥行3.30m天井高は不明である。石室主軸の方位は、W5°Nである。石室床面は奥壁部の右側に幅1mと玄門に向い1.9mの範囲に壊石を平坦面を上にして敷きつめその隙間を小石の河原石で敷きつめられていた。玄門石（袖石）は高さ75cmの直方体の石材を5cm地下に埋めて立てていた。おそらく側壁面の壊石の様子からして2~3段の平積ののち、数段の乱石積の後横架させたものと推察する。



第26図 石室の構造



第27図 石室の構造と出土遺物の実測図



第28図 碓床と断面図

石積みの方法は、狭門部の両側壁の第1石（腰石）は地上堀り込みのままであるが、玄室内の第1石は腰石として立てて使用しており、掘方も石材に合せて入念に行なっているが、石材は厚みのない大形石材を利用している。その上部に2～3段ほどは長平の壇石部分は隣合う石材との境目が1号古墳同様下位あるいは上位にある石材のほぼ中央部分にあるように積まれている。しかし、上部は欠損しているため、不明であるがやはり、乱石積となっているものと推察できる。また右側壁に対して左側壁の中央部においては、腰石の残欠が右側壁に対しても小石であることからして、現在にいたるまでに石室自体の崩壊がありえたと考えられる。これらを立証するものとして左側壁の（第26図）第2石の内部への落石がある。

（3）遺物の出土状態 （図版第15～26図）

3号古墳における出土遺物は、出土位置別に整理すれば、石室内部と閉塞口の外側、周溝内部とに区分される。

石室内部 須恵器 平瓶1・高杯1・杯身1・台付碗1・短頸壺2 碗1

鉄器 鉄鎌8・鉈1・鉄斧1・鉄鋤1・刀子1・馬具1

玉類 勾玉2・管玉3・ガラス玉23・銀環4

玄門（閉塞口外側）及び溝状遺構（周溝）においては須恵器の細片を出土したものと土師器の出土とがあり、これらの出土状況より特記すべき事項としては主体部に対して西側の溝状内の出土遺物である須恵器は、ことごとく細片化されており、しかもやや一定の間かくに群集して検出された。これに対して、東側での出土遺物は、土師武土器であり、壺、高杯、鉢で完成品は見られないまでも、出土状況は西側の須恵器の出土状況とは異なり長年の風雨により、崩壊したものであった。西側よりの出土遺物はすくなくとも意図的に破壊したものとしか取られない出土状況で、この出土状況は、閉塞口の外で検出した須恵器片と共通するものである。

石室内部における出土遺物は、閉塞当時のままとは推察しがたいまでも、出土遺物は副葬時の位置を保っているものと見られる遺物として、入口部分での鉄鎌と轡が（17-1）（17-2）と鉄鋤34とは両側に立てかけておかけられたものと考えられる。また土器18の平提と15の金環や集中的な玉類の出土は埋葬者の位置を暗示するにたる出土状況であった。

以上のように副葬的性格をもつ遺物のグループと、これとは別に祭祀的性格の強い遺物群とがあり、墓前祭祀として玄室の閉塞後直ちに行なった閉塞完了の祭祀行事と前庭部の壇丘での墓前祭祀行事の残存遺物が、前庭部の溝に堆積したものとも考察できる。これに対し、反主軸方位において検出した土器群は家族による追悼的な祭祀と考えることにしたい。

（森 光晴）

5 3号古墳の遺物

（1）須恵器

碗 (第29図) (3~1, 3) 図版第26図

口縁部は外反せず、やや外上方に伸びており、端部は丸くおさめてある。(1, 3) 口縁部及び内面はナデ調整を行っており、特に

No.	器高	口径	色調	ロクロ回転
3-1	3.9	13.7	0-16-0	右

(3)は全面的にナデ調整が見られる。(1)は体部から底部にかけて丁寧なヘラ調整を施し、底部は平らに仕上げてある。端部は段をなし、直立に仕上げてある。口縁部の立上がりはやや外上方へ直線的に伸び端部は丸くおさめられている。全体的にはコップ状の形である。底部をのぞき全面にナデ調整を行っており、底部はヘラ削を再度行いやや平らに仕上げてある。胎土中は砂粒石含有は少なく焼成良好である。

环身 (第29図) (3~2) 図版第26図

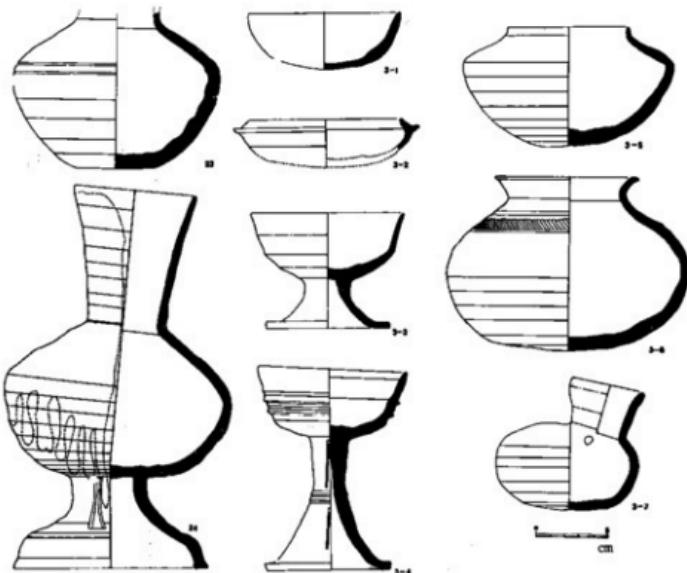
口縁部の立上りは内方へ傾斜し、端部は丸くおさめ、受部はやや上方に伸び、端部は

No.	器高	受部径	口径	色調	ロクロ回転
3-1	現存高 2.2	12.8	10.4	0-16-0	右

丸くおさめられている。口縁部から内面にかけて、ナデ調整が見られ受部以下は丁寧なヘラ調整である。

無蓋高环 (第29図) (3~4) 図版第26図

环部口縁部は外上方へ直線的に伸びるものであり、口縁から内面にかけてナデ調整を行っ



第29図 須恵器実測図

ている。体部には2段の凸線を施し、坏部内面の立上がり面に1本の稜線ができており、脚部と合

No.	器高	口径	脚高	裾径	坏高	色調	ロクロ回転
3-3	8.0	10.5	3.5	8.9	4.6	0-16-0	右
3-4	14.0	10.2	9.2	8.7	4.7	0-16-0	右

わして、3段階の製作課程を表わしているもので、脚部は細長く裾部にいくに従って広がっており、脚部に狭く細長く申し訳に透しが2方2段にめぐらされている。脚端部はヘラ調整により、棱となし直立におさめられている。

短頸壺 (第29図) (3~5, 6) 図版第26図

(5)は有蓋で、頸部から口縁部への立上がりは直口するもので、(6)はくの字形に外反する、前者は

No.	器高	口径	頸高	胴径	色調	調	ロクロ回転
3-5	8.2	8.2	0.9	14.5	0-16-0		右
3-6	12.1	9.9	1.6	16.6	0-15-0		右

肩部から胴部にかけて明瞭に屈曲し、胴部から底部にかけては丸く仕上げている。肩部において自然釉及び磁化鉄の付着が見られる。肩部から口縁部にかけてナデ調整を行い、胴部から底部にかけてはヘラ調整である。(6)は口縁部より、体部にかけて丁寧な横ナデが施されており、底部はヘラ調整である。胴上部には、上下2本の沈線により区画し、その中にヘラ描きによる右下りの斜線文を施している。さらにその下の体部に窯印にがしるされており、両者とも胎土、焼成は良好である。

平瓶 (第29図) (3~7, 8) 図版第26図

頸部から口縁部への立上がりは外上方に外反し、

No.	器高	口径	頸高	胴径	色調	調	ロクロ回転
3-7	8.8	4.7	13.0	9.7	0-16-0		右

端部はやや内湾している。胴上部両面に2個の把手を着けている。(7)口縁から肩部にかけて丁寧にヨコナデを行い、胴部から底部にかけてヘラ調整し、底面は平らに仕上げているもの(7)と丸く仕上げているもの(8)がある。(8)は注口部の立上がり面が極端に下がっているのは意図的に行なったものとみる。胎土、焼成は良好である。

坏蓋 (1号墳出土) は、陶邑のTK43型式に近いものである。坏身 (1号墳-2, 3, 4, 5, 6) は、TK-43型式及びTK-209型式に平行し、(3号墳-2) は、TK-217型式に相当するものである。次に高坏 (1号-9~12) (3号-4) は、TK-209型式に相当するものであり (1号-8) 及び (3号-3) は碗に近く (1号-9~12) の退化型態でこの地域独自の製作を考えたい。短頸壺は (1号-15, 17, 18) (3号-5) (1号-13, 14, 16) であり、TK10~TK209型式に相当する時期であり (3号-6) (1号-19) は、TK-43、長頸壺 (1号-20, 21, 22, 23, 24) はTK-209型式~TK-217型式に相当するものである。(3号-7) の平瓶はTK-217型式に相当するものである。以上の事から1号墳の須恵器は、TK43型式及びTK-209型式に近い時期であり、陶邑の報告でいう、Ⅱ期の後半に概当し、

6世紀後半の時期である。

次に3号墳の須恵器はTK 209型式～TK 217型式に近い時期であり、陶邑のⅡ期後半～Ⅲ期初頭に概当し、6世紀後半～7世紀初頭の時期である。以上の他に出土した須恵器片は時期的に余り差異はないものと考える。
(西尾幸則)

(2) 装身具

玉類(第30図) 図版27図

小玉 (1-5)

色調暗青色を呈するガラス玉で、4
5はやや厚味を増しているが、他はほ
ぼ同形である。6個の小玉の出土をみ
ている。

丸玉 (6-7)

いづれもガラス玉で、形はさまざま
であるが、色調は全て暗青色である。

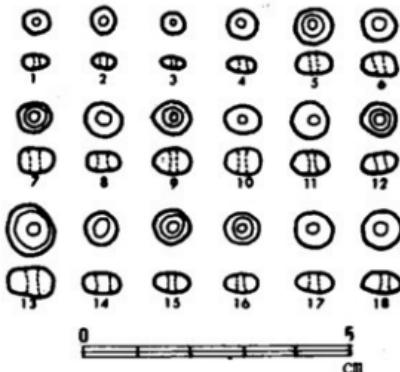
18個出土している。

水晶玉 (21)

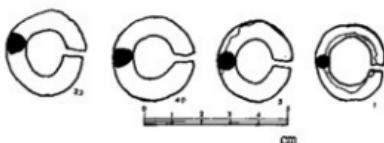
水晶製の丸玉で、穿孔は1方向より
穿たれている。また送りもみられる。

勾玉図(22, 23) 図版

2個の出土例をみるとおり、と
ても硬玉で尾部を欠損している。22は
発掘時に頭部の一部を欠いており、腹
部は熊首状にえぐり込みがみられる。



第30図 玉と勾玉実測図



第31図 耳環実測図

No.	外径	厚味	孔径	色調	No.	外径	厚味	孔径	色調
1	5.05	3.03	1.1	16-12-2	10	8.01	5.87	1.4	16-11-4
2	5.13	3.21	1.5	16-11-4	11	8.90	8.20	1.7	々
3	6.04	3.09	1.4	16-11-4	12	8.55	7.05	1.2	々
4	4.07	4.00	0.7	16-14-2	13	7.81	6.79	1.4	々
5	5.52	3.49	1.3	16-11-4	14	7.55	5.10	1.6	々
6	6.26	5.00	1.9	々	15	9.10	6.32	1.6	々
7	9.19	6.31	1.6	々	16	8.85	5.85	1.4	々
8	7.38	5.49	1.5	々	17	8.51	6.72	1.5	々
9	7.76	8.53	1.05	々	21	10.33	6.94	1.5	透明

管玉 (18~20)

碧玉製で、3個ともに緑の地色を有している。穿孔は一方向から穿たれている。

No.	重量	全長	長径	孔径	短径	孔径	色調
18	—	10.52	5.37	2.3	5.23	1.8	13-16-5
19	1.3	21.60	6.4	2.5	6.3	1.2	11-12-3
20	0.1	10.73	2.05	1.0	2.04	0.7	12-17-2

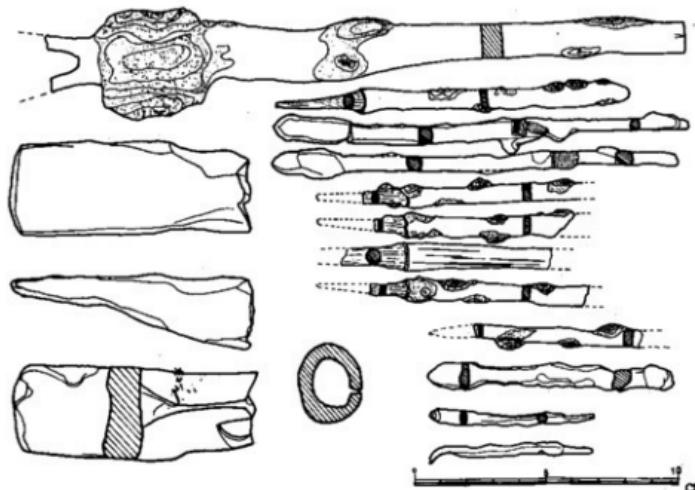
耳環

3号墳からは4個の出土数をみており、金の鍍金を施したものと銀を鍍金したものとの2種類に分類できる。金環は銅環に鍍金したものである。器形はややへん平な梢円形を呈している。銀環は下表に示したように、金環と比較すれば比重がかなり小さく、いかなる材質のものに鍍金したものかは現段階では断定し難い。ただ金属製であることは考えられないであろう。また、金環の断面はほぼ円形であるが、銀環は梢円形であるという相違点もみられる。(沖野 新一)

(3) 鉄器

鉄鎌 第32図 図版27図

3号出土の鉄鎌は合計9本である。うち3本は片刃箭式(腹快片刃箭式)のものである。その外に鉄鎌8にみられる形式は、両丸造りの両丸さく箭式とみることができるが、他の鉄鎌は先端部が欠損しており不明である。ノミは表面桜皮巻を認められるものもある。



第32図 鉄器実測図

鉢

本遺物は袋部を欠損しており、袋部の基部を残すのみであるが、袋部は基部に向って漸次開く円筒形をなすものと推察できる。現在長24.5cmで刃先は方頭胴根斧箭式である。

鉄

全長 9.4cm幅 3.6cm刃部中央部の厚 1.3cm、袋状基底部は梢円状をなし、その径は長径2.9cm短径 2.5cm袋状部 3cmである。

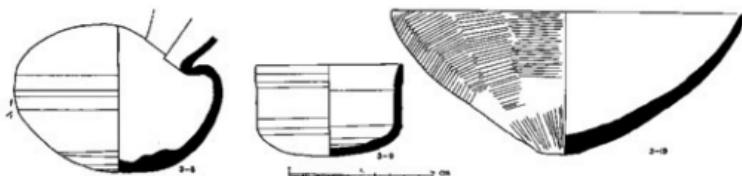
鉈

実に小形の鉈であり、全長 6.3cmで刃先より 1.3付近で内湾している。

馬具

くつわがあるが鋳化がはげしくほとんど形をとどめていない。

検出された鐵器の内、鐵鎌と馬具は左玄門部で検出され、鉢は右玄門部で発見された。これら鐵や鉈は玄門部に立てかけられて副葬されたものと推定できる。 (森 光晴)



第33図 土師式土器実測図

6 2号墳の調査と土塙墓

2号古墳は小祠を祭り墳丘その他の外部遺構は認められなかったが、小祠を祭っているところから調査対象としたが、完全に壊滅しており現在の耕作土内に2~5cm内外の玉石を発見したが、それぞれ擾乱されており遺構として調査続行は不可能と断定した。調査対称と小祠のあるところから2号古墳とした。

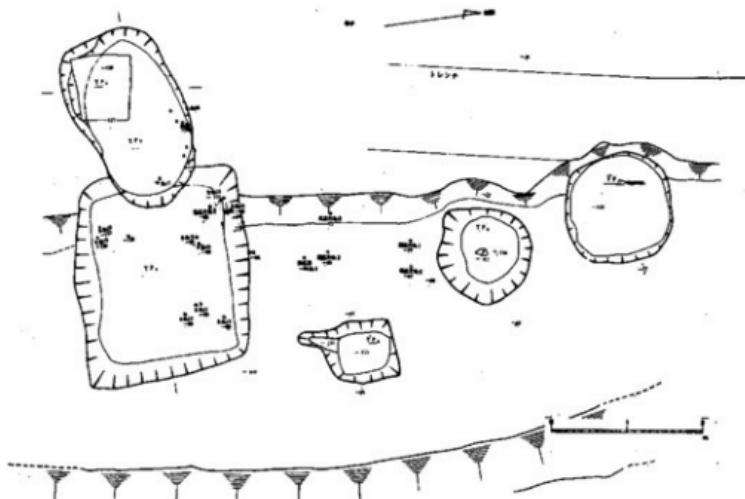
2号古墳周辺のボーリング探査により土塙を確認した。

土 塙 墓

土塙は蜜柑園に点在して確認されたが、ビワから12年前蜜柑に転植した土地である。地形は本丘陵中傾斜は急傾斜であり、その傾斜を緩和さすために畠地巾は3~5mの階段状の畠地である。

規模と形態 (第34図)

土塙墓は合計6ヶ発見された、円形の土塙墓、2基、方形3基、楕円1基である、内TP1、内TP2、TP3は掘方の土面に3~5cmの三和土を使用していたが、TP3のみ底部に三和土をたたきしめていなかった、またTP6の底部に植物性のゴザ状を敷き床面としていた。TP4、TP5は床面も側面にも三和土その他の使用はなく、ただ地山を掘り下げたものである。しかしTP4、TP5に共通するものとしては壁面は入念に調整している点にあった。



第34図 土塙実測図

No.	状態	直 径	深さ	壁面状態	出 土 遺 物	人骨	そ の 他	形 状
T P 1		140cm	55cm	三 和 土	な し	有	壁面底部天井	円形形
T P 2		125cm	31cm	タ	タ	タ	タ	タ
T P 3		9.5cm	57cm	タ	タ	タ	タ	方 形
T P 4		235×275cm	40cm	地 山	須恵器片、鉄鎌	なし	床面調整あり	長方形
T P 5		140×240cm	132cm	タ	鉄 片、磁 器	タ	床 面 平 担	橢 円
T P 6		100cm	92cm	タ	磁 器 片	タ	植物性數物	方 形

各土塙墓よりの出土遺物は細片であることと表土より採集した磁器片と判別されるものに乏しい。TP4にて出土した須恵器片も明らかに落ち込みと見られる。その他の遺物としては、TP4、TP5より出土した鉄片類がある。内TP5より出土した鉄片は10数本の矢と瓶であった。瓶は完形でなく半載された形で出土しているが、鉄板の上に糸をまきその上面を黒漆でかためている。

土塙墓については、中世及び近世の墳墓を松山市11号バイパス及び東道路工事の事前発掘調査において、20数基調査実例がある。本遺構における考察は本年度発行予定のバイパス関係の報告書において記述することとしたい。
(森 光晴)

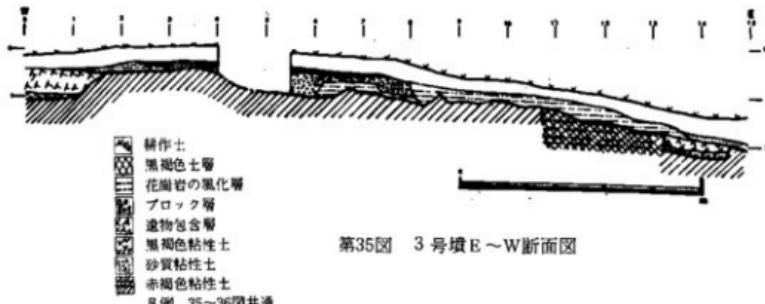
7 小 結

久万の台古墳群は、戦前戦後を通じて数基の古墳が破壊され、または盗掘にありそのすべてが、広義の意味からすれば破壊されている。

久万ノ台古墳群は、そのままいざれも半地下式の掘方による横口式の古墳で、時期的には御産所11号古墳と同時もしくは若干時代は下る時期の群集墳と見られる。

3号古墳は時期的には第1号古墳よりやや下ると見られる。3号古墳は現在では初見の古墳構造であり、更に前庭部の墳丘上での発見遺物と、奥津城に対する諸行事と明別できる。すなわち前庭部の出土品が須恵器であることに対して、当地区での発見遺物は土師(図第33図)のみの出土であり、しかも生活中心的な壺、杯、鉢等であり、これらの出土状況は破損をしているものの一括出土を見ており、復元可能である。これに対して前庭部における出土遺物は完全に、しかもその飛散状態から意図的な宗教上の行事が行われ、集団社会の許容する宗教上の行為と見るべきであろう。飛散土器片の復元遺物(図版16)の周辺内の遺物において松ヶ谷古墳の出土遺物と共に非日常的な器物の供養物と判断すべきものである。このことを通じて墓前における祭祀的行為とみたい。

2号古墳における出土遺物から推考すれば、第3号古墳は時期的にやや下るべきであろう。2号古墳の特記事項として屍床の設計にあるといえよう。屍床については、かいなご1号古墳(註1) 久万の台3号古墳、東野古墳などに見られ、6世紀末に普遍的に広がったものといえる型態である。



第35図 3号墳E～W断面図



第36図 1～3号への断面図

断面図は1号墳と3号墳の(図第17)での地層に見られる如く地山掘りこみである。

土塚墓については、三和土を使用した墳墓に松山市東石井土居町があるが、当発見例では種を挿入する以前に底面及び壁面を完成させた後に棺の安置を行なったものと考えられる。

この形式による塚墓は副葬品にとぼしく時期的な問題は今後の事例を待つ必要がある。

追記 3遺跡の絶対値

忽那山	東径	132°	42'	12"	北緯	33°	50'	26"
御産所	〃	132°	44'	02"	〃	33°	50'	40"
久万ノ台	〃	132°	44'	25"	〃	33°	51'	29"

である。

結語

御産所11号墳、忽那山古墳、久万ノ台1号墳、2号墳はいずれも後期古墳の様式に属しており、御産所11号墳以外は墳丘及び石室の半壌等により全貌は不明であるが、残存する遺構から考察する限りにおいて、横穴式石室といえる。各古墳の開口方位は久万の台1号は南口、2号は西口、御産所11号墳竪穴、忽那山古墳は北口、かいなご1号2号は南口、松ヶ谷古墳は南口三島神社古墳主体部は南口と現在までの調査事例では南位に開口する古墳が9割を占めるがこの方位の関係については、当地における古墳の大半が、開口していることもあり、早急に調査記録を作成すべく努力中である。これらの古墳の内彩色墳は三島神社古墳以外では横穴式古墳では発見されていない。本報告書で対称となる古墳は発見されていない。彩色墳は松山地方では、箱式石棺にその事例が多く横穴式石室には彩色墳はほとんどしられていない。

ない。主体部の石積方法については、自然石をそのまま使用するもの、壊石を混ぜ合せて使用するもの、壊石のみの石積とするものの3方法であるが、これらの調査についても未調査のままに放置されているといわざるを得ない、現在までに取り扱ったものについて記述し、その責めをはたしたい。

石室の石材については、和泉砂岩を利用したものと和泉砂岩に花崗岩を混合した石積となっているものとが多く、特に壊石による主体部の石積は和泉砂岩が最も多い。これに対して花崗岩に統一された石材で構築された石室はまだ発見されていない。箱式石棺においては、縁泥片岩で統一されているものと花崗岩で統一されているものとに大別される。

床面の形態については、相共通するものに玉石の配石があるが、屍床については、区割されてほどこされているもの玄室内部全面に敷石しているもの、石室内部を2分して敷石しているもの等、現段階では資料不足であり事実の記載以外には一步も出られない状態にある。

また玄室の排水に対する構築の時点においての配慮からして意図的に構築されたものとしては、現在までの調査範囲において記述すれば、かいなご1号墳及び三島神社古墳の石室についてのみ排水構造が認められると共にその排水構造が狭道部まで及ぶものに三島神社古墳がある。これら排水構造をそなえた古墳の外形は、かいなご1号墳は方墳であり、三島神社古墳は前方後円墳であった。これ以外の古墳のほとんどは地山掘り込みの主体部構築工法を取っており排水構造は無理となる。この現象のかえりが、壊石の敷石をもって、地山面より約10cmにへつらいその上部に玉石を敷きつめることにより排水効果を計ったものと考える。中央政権における薄葬令の普及度は別としても、当時の人々の死者に対する心情は当世風に変化しつつあったことは、久万ノ台1号墳に見られる、屍床の簡略化等においても十分に理解し得る現象面として把握したい。

(森 光晴)

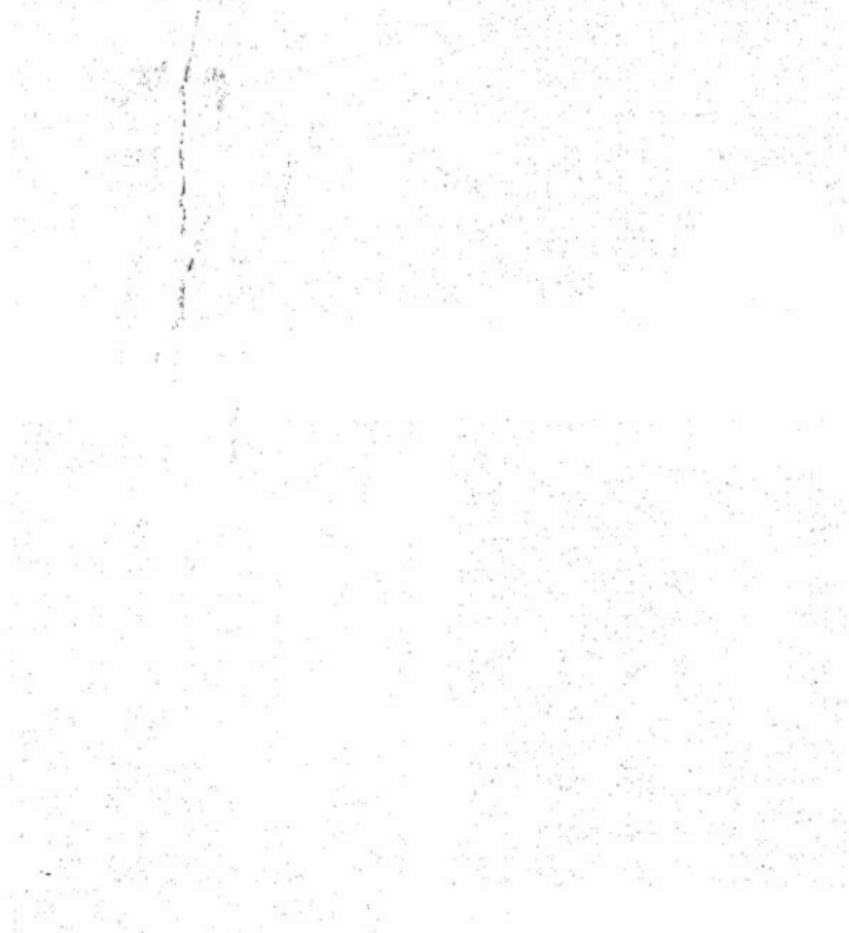
参考文献

- 日本古代遺跡の研究 (斎藤忠)
古墳の設計 (欄国男著) 築地書館
古墳 (末永雅雄)
須恵器 (田辺昭三) 平凡社
湖西線関係遺跡調査報告書 (湖西線発掘調査団、田辺昭三編)
陶邑古窯址群 I (田辺昭三、横山浩一)
陶邑、深田 (大阪文化財センター)
船橋 I・II (平安学園考古学クラブ)
美術工芸 (須恵器特集 S46版) (田辺昭三)
滋賀県文化財調査年報 (滋賀県文化財保護協会)
王基山古墳調査報告書 (倉敷市教育委員会)
愛媛の文化 (第4・6・9号) (愛媛県文化財保護協会)

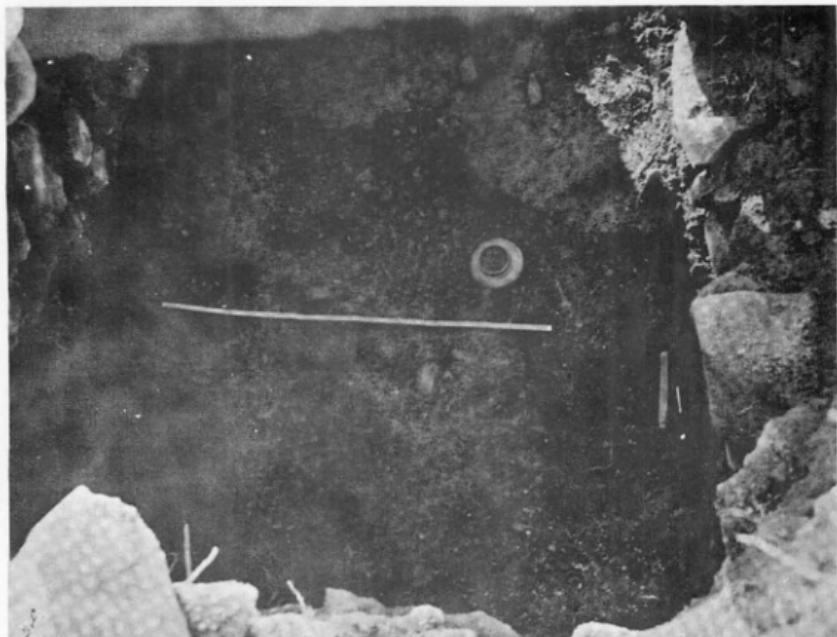
三島神社古墳調査報告書 (松山市教育委員会)

天山・桜谷古墳	(夕)
古照遺跡調査報告書 I	(夕)
国道バイパス調査報告書	(夕)
釜ノ口遺跡調査報告書	(夕)
かいなご・松ヶ谷古墳	(夕)
岩子山古墳	(夕)

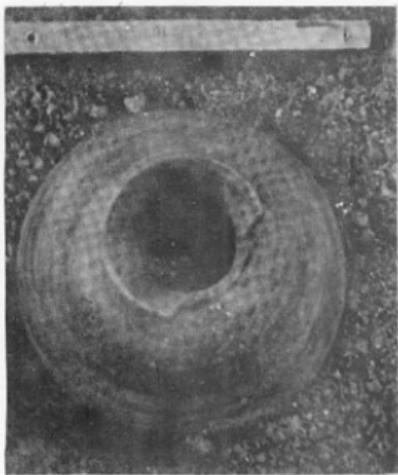
図 版



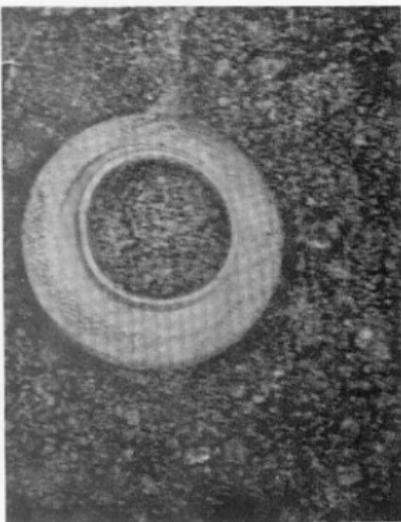
図版第1 出土状況



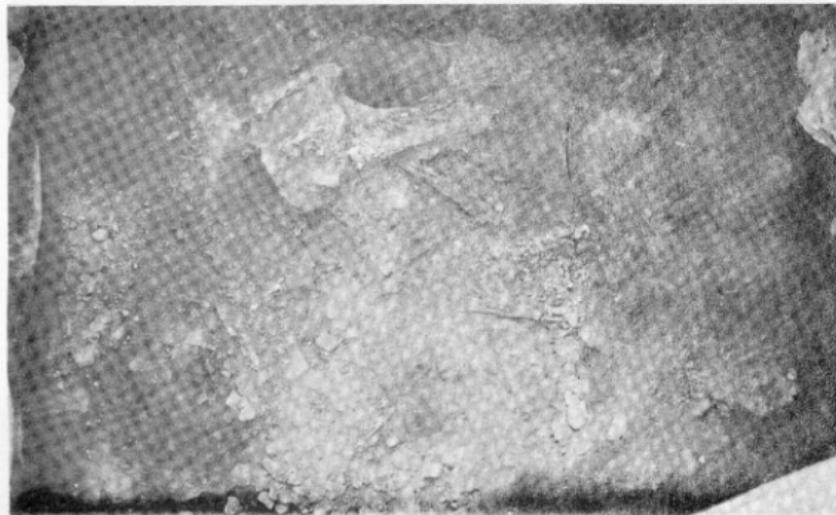
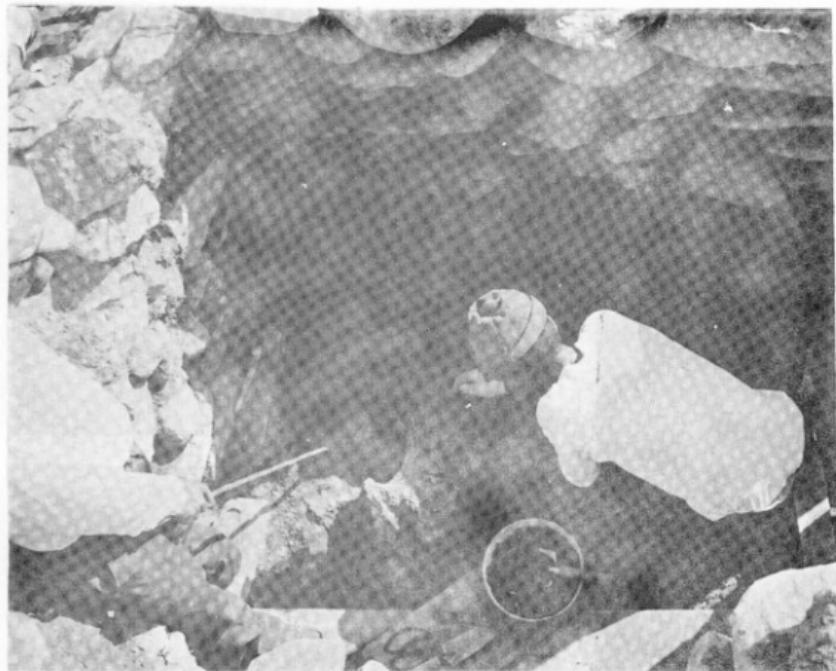
奥壁部より見る遺物の出土状況



同上アップ

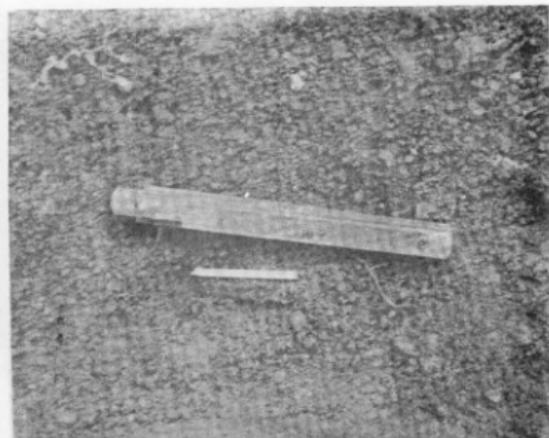


図版第2 人骨の出土状況



図版第3 御産所の遠景

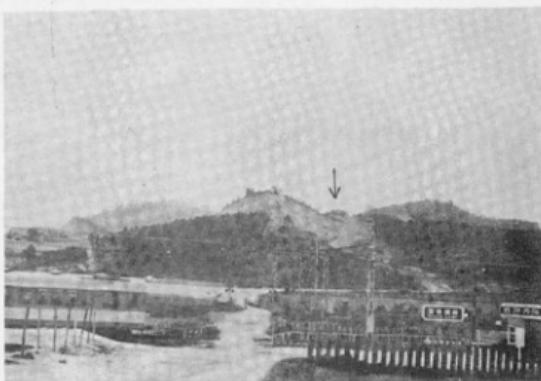
上、遺物鉄鎌



中、主体部と右側壁の基礎石



西衣山駅より見た11号墳



図版第4 忽那山遭跡の状況



山麓の汚物処理場



1号墳落下状況



転落の1号墳遺物採集

図版第5 遺構の出土状況②



上左、転落した
石室上下転倒

上右、転落位置を
下方よりとる。



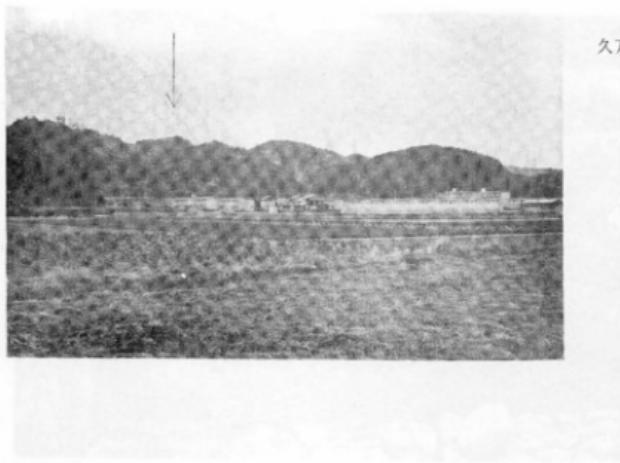
下、古墳外圍の
遺構

中、古墳外圍の
遺物

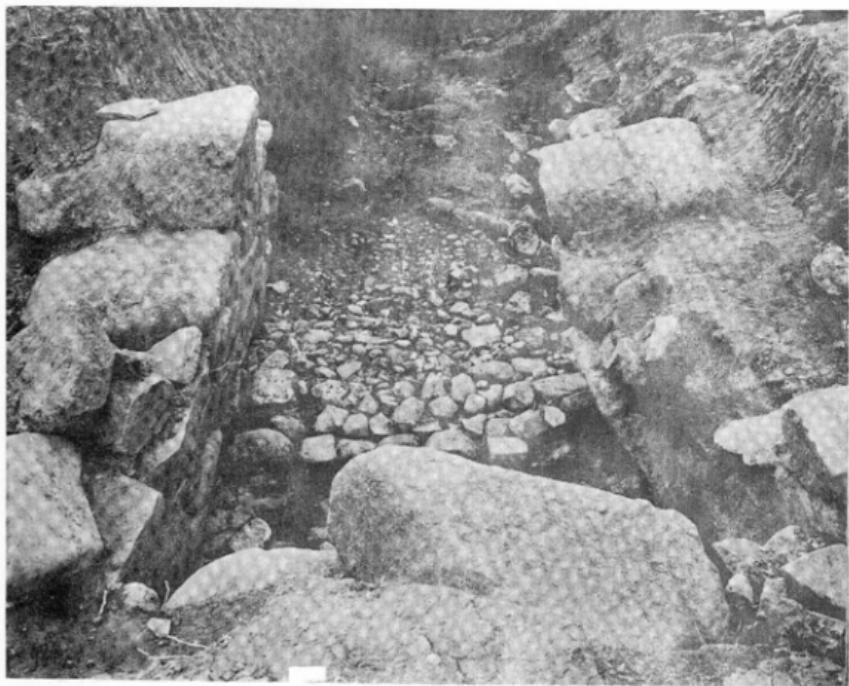


図版第6 久万ノ台全景と1号墳

久万ノ台遺跡発掘地圖



久万ノ台遺跡発掘地點



1号墳石室内部

図版第7 遺構1



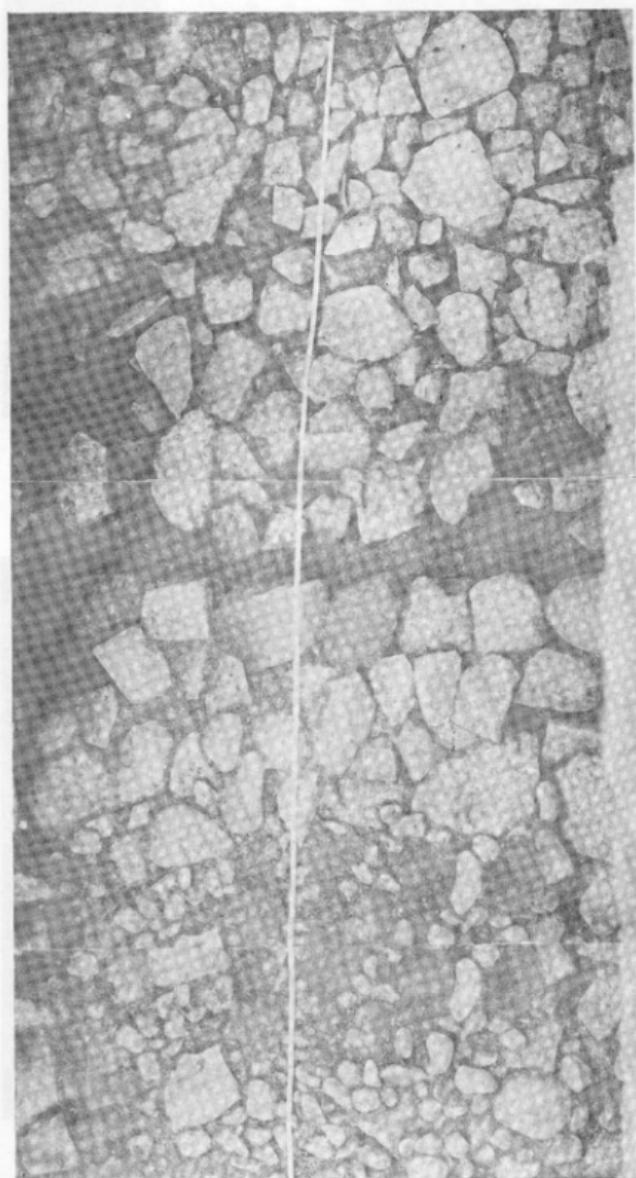
1号墳奥壁の立石

塙石の矢根が見られる

東壁の塙石積状態



1号墳右側壁石積



奥壁側

区画された礫床

前庭側

図版第9 遺構3

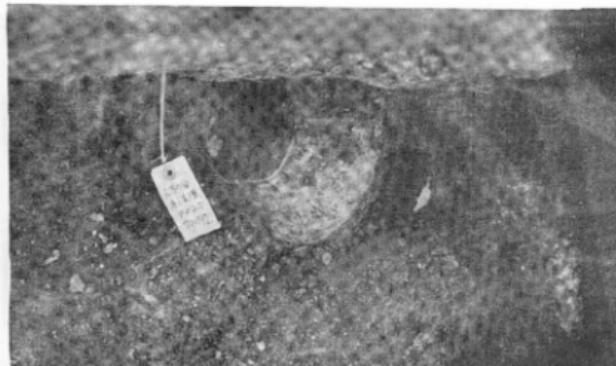


礎床の割り付け



1号墳の内部のようす

图版第10 出土状况 1



遗物出土状况

1



2

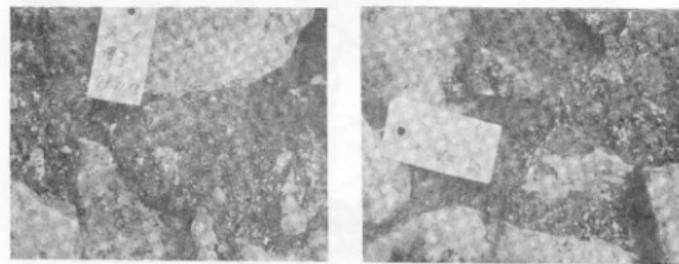
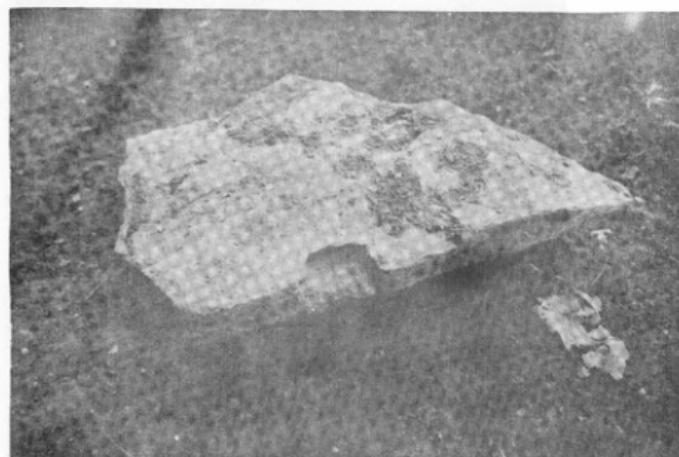


3

図版第11 出土状況2

1号墳内部の鉄器と
人骨の出土状況





人骨の細片

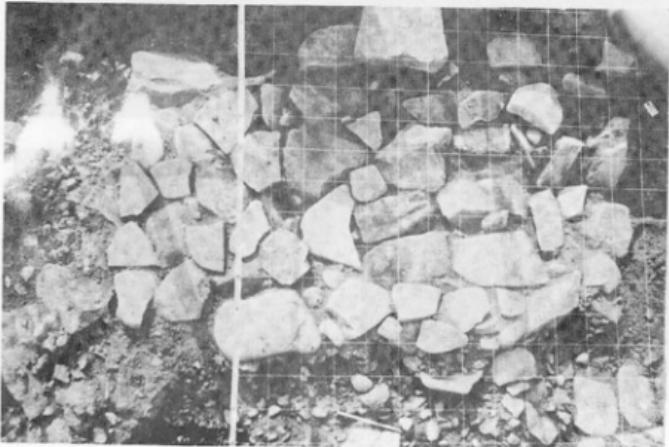
図版第13 主体部の状況(1)



3号墳の出土状況

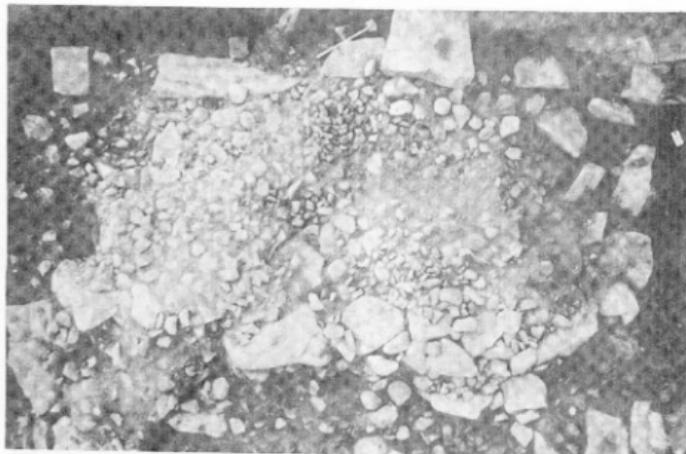


玄門立石と道の
掘り方



礎床

図版第14 主体部の状況②



左側壁より
見た礫床

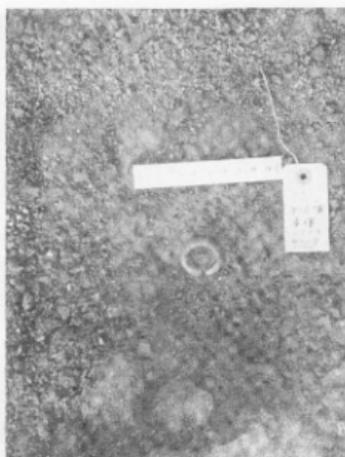


内部の出土状況



奥壁よりの礫床

図版第15 遺物出土状況



上, 金環の出土状況

上, 金環の出土状況

中, 鉄錐とクツワ

中, 高坏

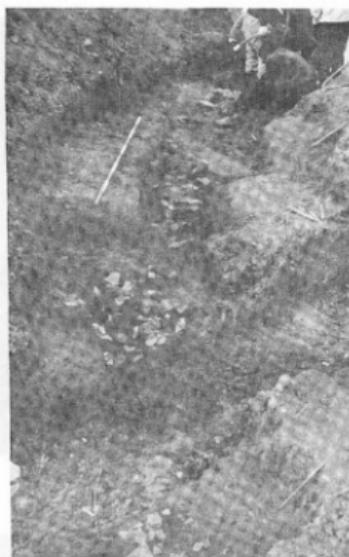
下, 玉類の出土

下, 壺 遺物の出土状況

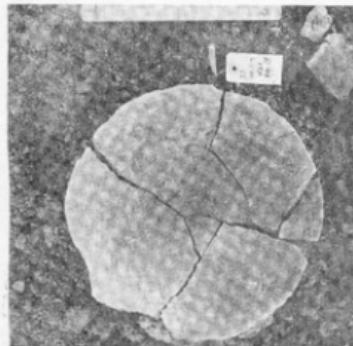
図版第16 遺物出土状況②



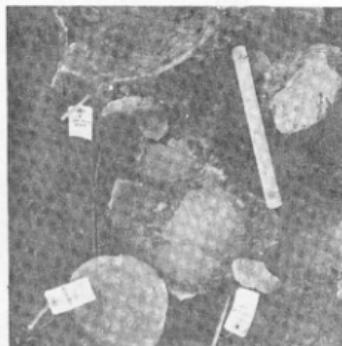
同構内部



同構内出土状況



同上アップ

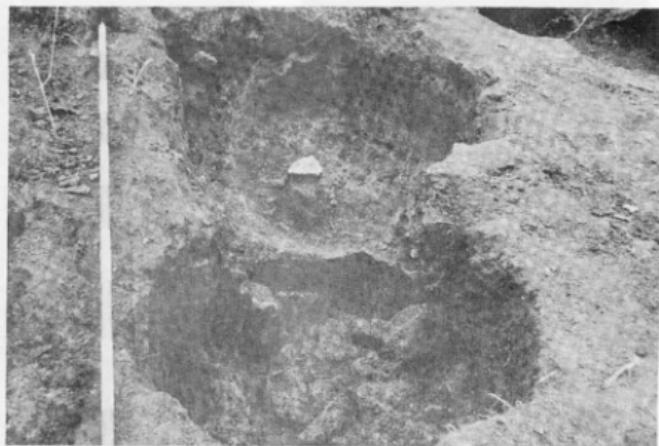


同上アップ



同内の遺物

図版第17 遺構の状況 1



三和土使用の壁面・
床面



天井部の三和土
落下状況

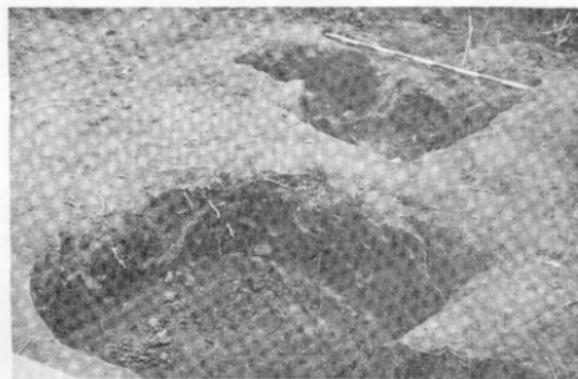
T P 4 の鉄器出土状況

網目間10×10cm

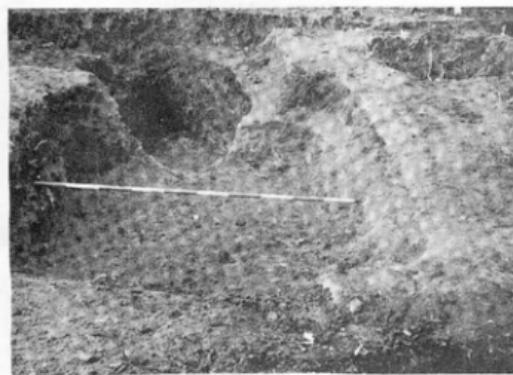
図版第18 遺構の状況2



植物遺体検出



壁面の三和土



上抜の切り合い

TP 4 鉄器出土

図版第19 発掘状況と遠景



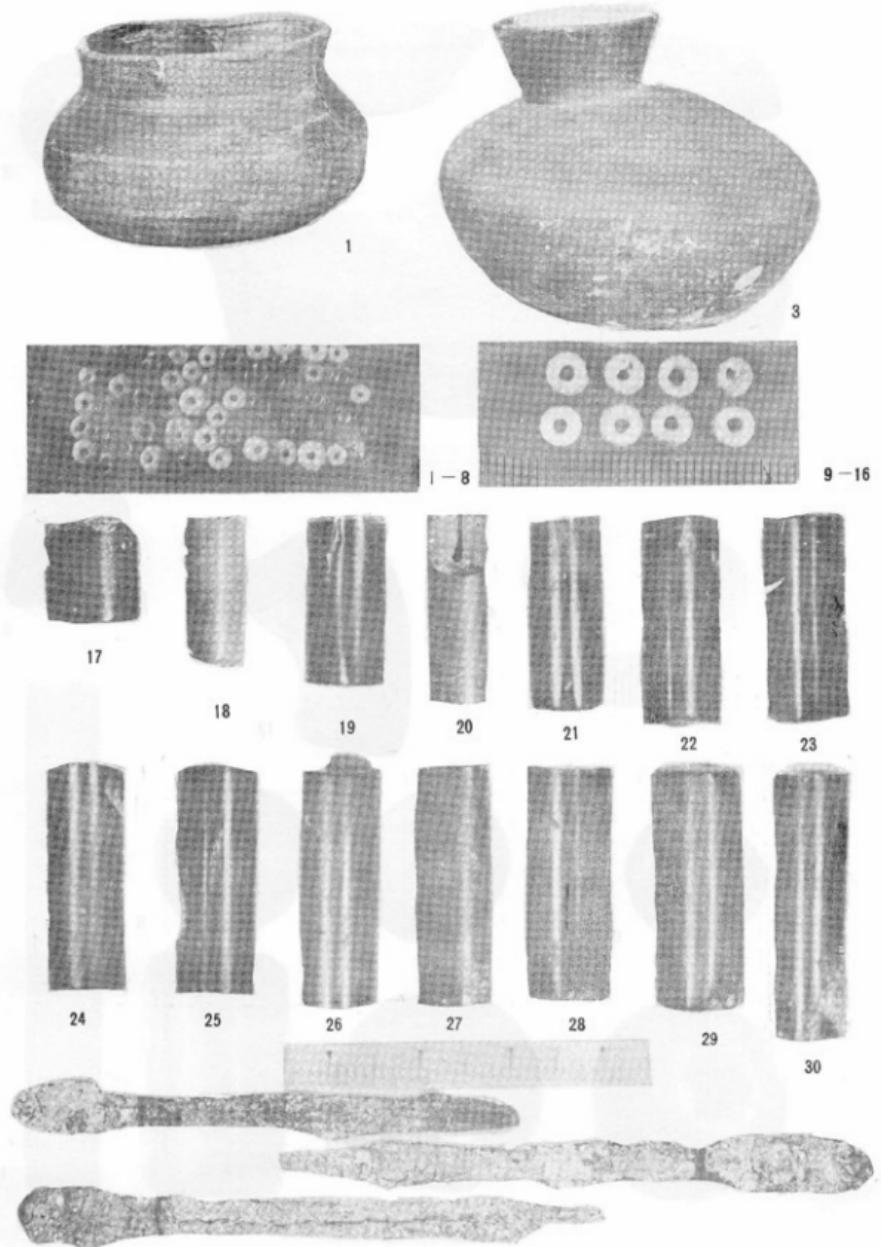
上、発掘前

下、発掘風景

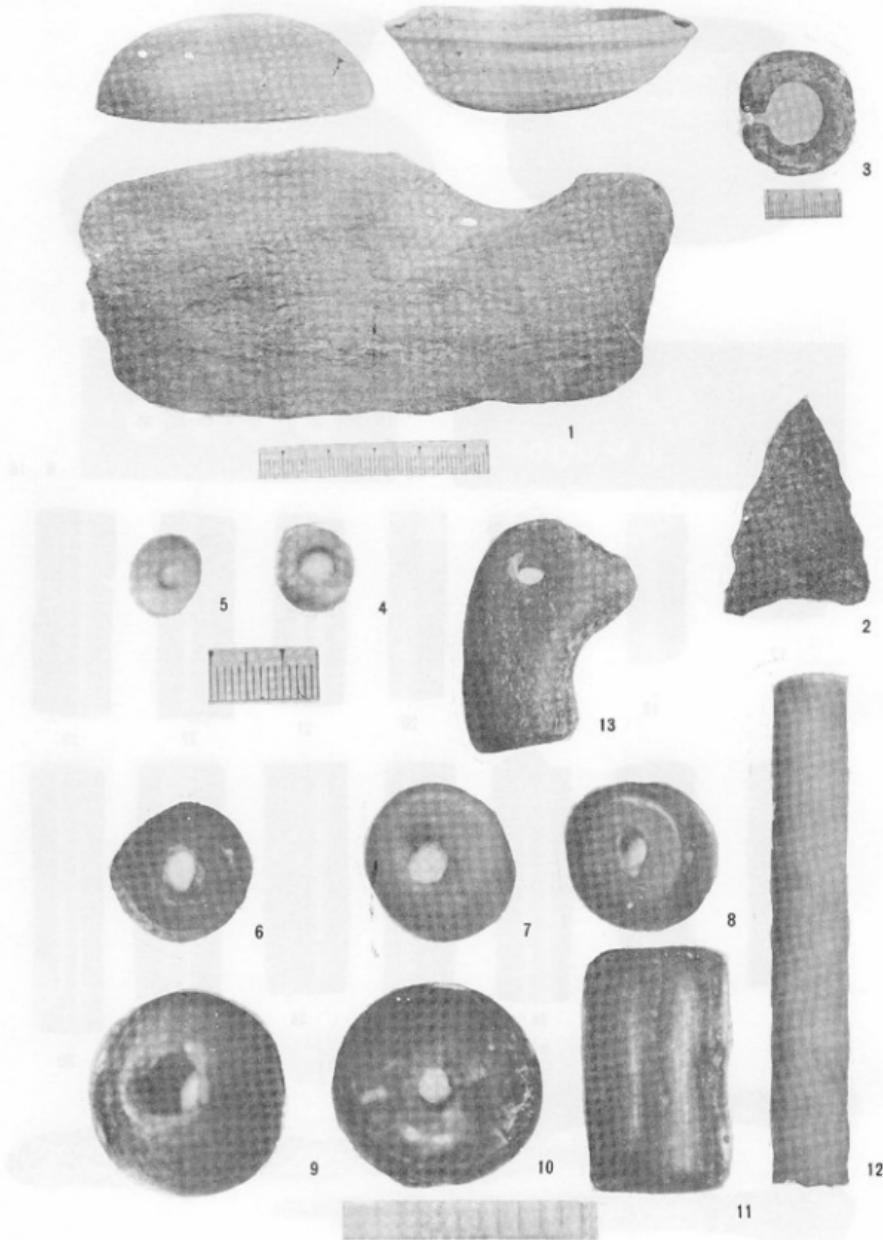


上、トレンチ調査

下、土砂採集により露出した
石積と墳丘



圖版第21 無那山出土遺物

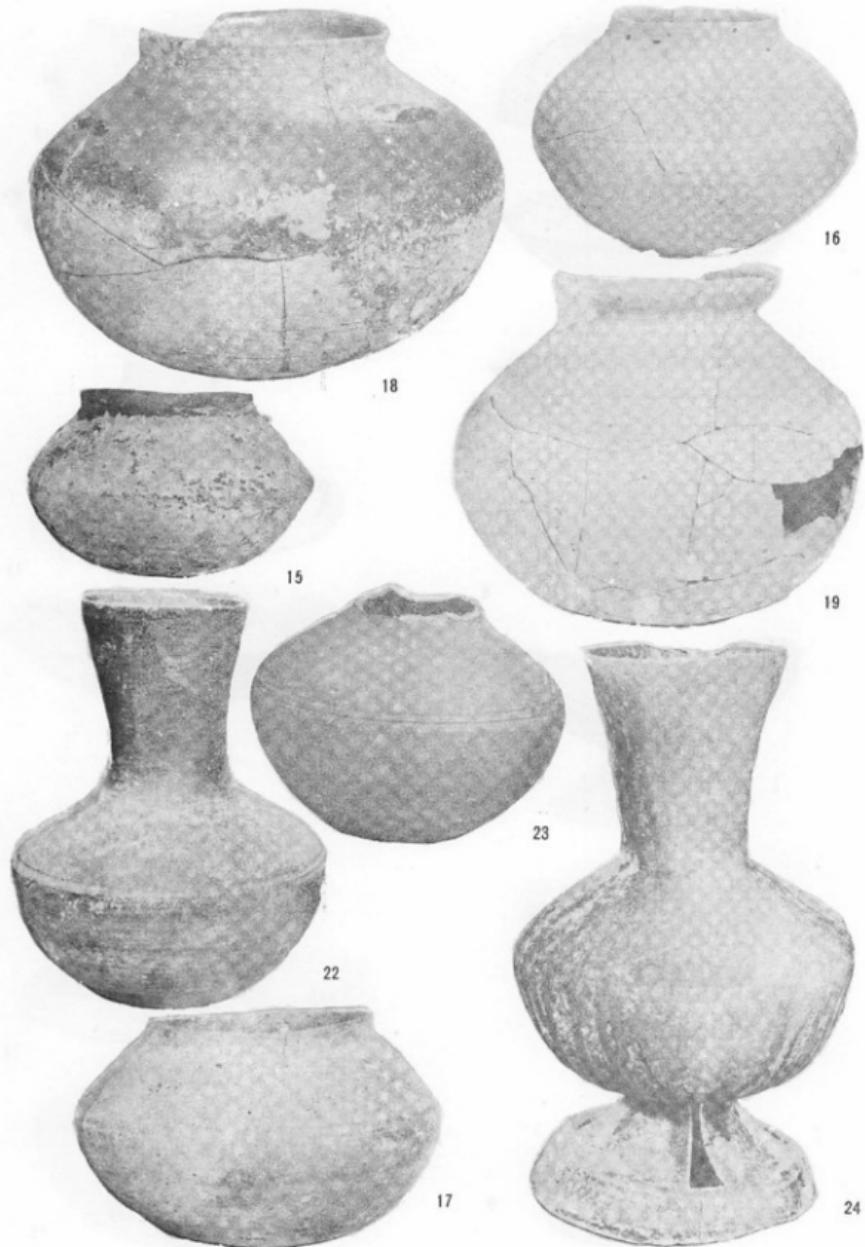


図版第22 久万ノ台1号墳出土遺物



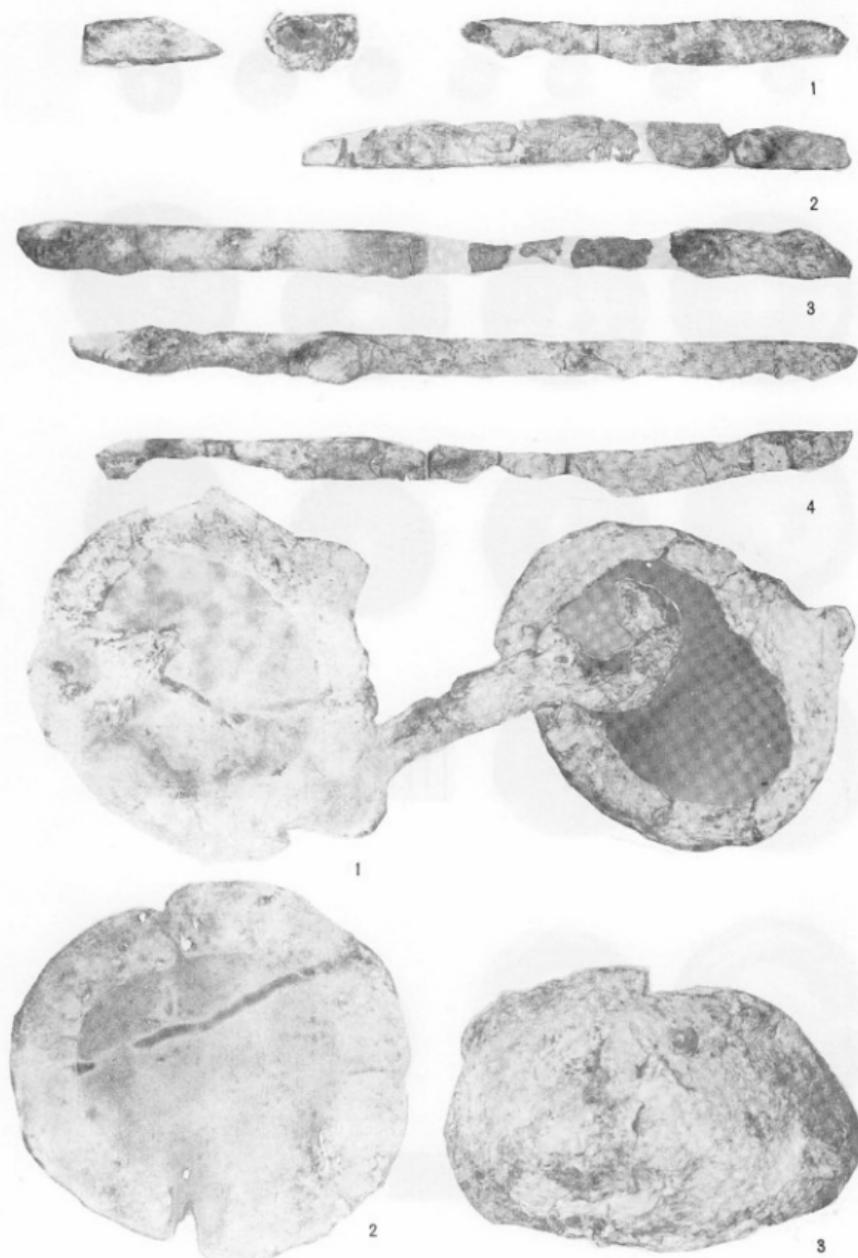
図版第23 1号墳出土遺物2

1号墳出土遺物2(續) 陶器類





圖版第25 1號墳出土遺物4



圖版第26 1・3號墳出土遺物・鐵器 1號墳・須魚鹽3号窯



4



5



6



3-1



3-5



3-3



3-6

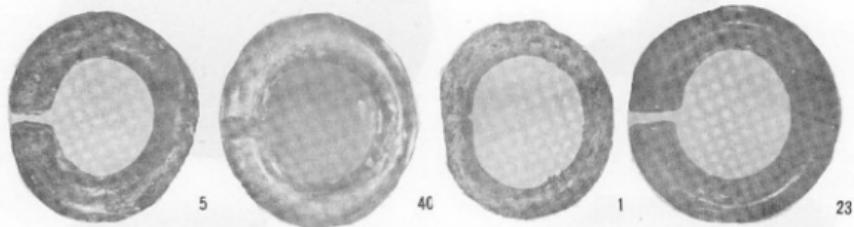
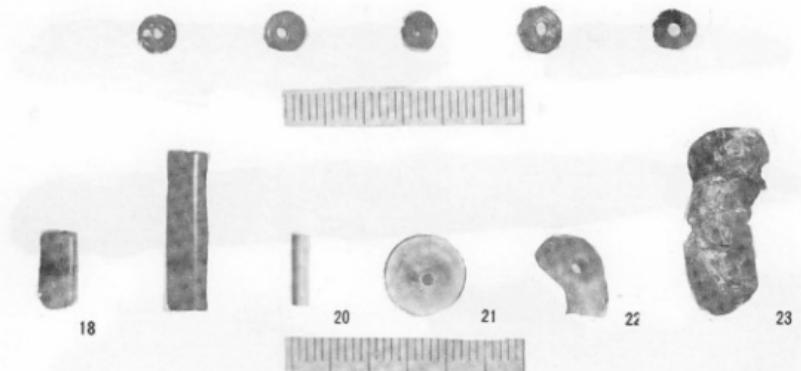


3-4



3-7

図版第27 3号墳出土遺物



松山市文化財調査報告書

1. 三島神社古墳	昭和47年（絶版）
2. 天山・桜谷古墳	昭和48年（々）
3. 長隆寺廐寺跡	昭和49年
4. 古照遺跡	々
5. 笠ノ口遺跡	々
6. かいなご・松ヶ谷古墳	昭和50年
7. 国道バイパス概報	々
8. 岩子山古墳	々
9. 御産所11号古墳・忽那 山古墳・久万ノ台古墳	昭和51年
10. 古照遺跡II	々
11. 文京遺跡	々

松山市文化財調査報告書 第10集

御産所11号古墳・忽那山古墳・久万ノ台古墳

昭和51年3月31日

編集 松山市教育委員会

発行 松山市教育委員会

〒790 松山市二番町四丁目7番地2

TEL (0899) 48-6600~4

印刷 松岡印刷株式会社
